

源氏物語 桐壺卷の本文と物語の享受

岩 下 光 雄

1

吉岡曠氏の「河内本『桐壺』の巻の校訂過程」(岩波書店「文学」昭和59年1・2月号所収)は、示唆にとむ論考ではあるが、本文処理の方法に問題もあり、「源氏物語大成」に依拠されたゆえの誤謬も見られるようである。武蔵野書院の「校注 源氏物語」を底本に、秋山虔、池田利夫両氏の編になる「尾州家河内本 源氏物語」(武蔵野書院)、思文閣出版 陽明叢書「源氏物語」などの本文によって校合を加えた筆者の手沢本によれば、氏の結論にはにわかに従い難いものがある。しかし、従来、

青表紙本・河内本が作られてから、この二系統の書写本が主流になったが、といってこの二系統以外の伝本がないわけではない。これらを一括して「別本」と呼ぶが、その中を大別すると、理論的には、(1)青表紙本・河内本以前の「古伝本」の系統の本文、(2)青表紙本・河内本以後の(イ)混成本と(ロ)改竄本文となる。鎌倉時代に書写された別本の中には、(1)に属するものがあるはずだが、(1)と(2)とを識別することは甚だ困難である。陽明文庫本・保坂本・東山御文庫本・穂久邇文庫本などがまともに残っているが、全部が別本であるわけではない。その他

というような理解がなされてきたなかで、氏の論稿がもつ研究史的意味は大きなものがあるように思われる。

吉岡曠氏の研究は、最近の、源氏物語の本文の一部をもって、全体を推しはかる本文批判のやり方に対する厳しい批判からなされたものであり、源氏物語の本文批判が一帖単位でなされなければならないこと、本文批判の可能性の存すること、などについての指針を与えられたものとして、その意味は高く評価されなければならない。それは、現代の源氏学に対するきわめて適切な警鐘である。拙論も、その曠尾に付しての論証ともいえるべき一面をも、また持つことができるならば、望外のよろこびである。

2

青表紙本に対する尾州家河内本の異文が、別本系統の諸本の異文とどのような関係にあるか、また、別本系統の異文相互の関係がどのようになっているかを、手沢本の頁ごとに明らかにしながら、本文の系統、性格を分析していくことにする。各項の頭書きの算用数字は手沢本の頁数、諸本の略称は『源氏物語大成』によった。分類の基準は次のごとくである。

第一類 河内本の独自異文

第二類 河内本の異文が別本諸文と共通する異文

第三類 河内本の異文が別本諸本とほぼ共通する異文

第四類 別本諸本の一本のみが有する独自異文

第五類 別本諸本の間で共通する異文

第六類 別本諸本の間では共通する異文

手沢本の校合は、諸本の本文を色分けによって書き入れてあり、本文の異同が識別しやすいように作られている。これによって手沢本の最初の三頁分、⑤頁から⑦頁までの異文を調査した結果を例示する。各項の最初に示す本文は手沢本の底本の本文であるが、第三類だけは河内本の本文を最初に示した。「源氏物語 夕顔の巻疏注」(本誌創刊号 昭59年3月)で指摘したごとく、このように巻の一部分を引いて本文の性格を論ずることは、誤膠をおかすことであり、きわめて恣意的なものに過ぎないが、本文処理の方法を示するという意味から例示することにする。以下頁ごとの異文は資料として別に掲げた。異文数が「夕顔の巻疏注」と異なるのは、新しく校合に加えた諸本の異文に対応させて処理したことや、異文の見落しなどが多少見られたことなどによる。

第一類

⑥ いにしへの——いにしへ

第二類

- ⑤ 給ひける——給ふ 国・⑤えはばからせ——ははからせ 国・陽・麥・御・⑤あいなく——あいなう 陽・
⑥ 事——事と 陽・麥・国・御・⑥世に——世にたくひ 麥・御・⑥心もとながらせ給て——心もとなり 御・
⑦ 御かたち——御かほかたち 御・⑦御思ひ——御思ひはかり 御・国・麥・⑦母君——母君は 陽・御・麥・
⑦ 上宮仕など——御・麥・⑦まつはさせ——まとはさせ 陽・⑦何事にも——何事も 御・麥・

第三類

⑥ 心もとなり——心もとなり給 麥・

第四類

⑤あり——おはし 陽・⑤はじめ——本より 御・⑤御方々——方々 麥・⑤給ふ——給ける 陽・⑤同じほど
——ナシ 陽・⑤ましてやすからず——ナシ 陽・⑤つけても——つけてもやすからぬ事おほく思ひつゐるまま
に 陽・⑤恨みを負ふ——なさををおゝふ 陽・⑤心細げに——心細げに思ひ 陽・⑤里がち——里かに 国
⑤あかず——ナシ 国・⑤人の——人／＼ 国・⑤あかず——ナシ 国・⑤人の——人／＼ 国・⑤ためしに
——ためしと 陽・⑤あいなく——ナシ 国・⑤そばめつつ——そばめて 国・⑤まばゆき——まえゆき 御・
⑥こそ世も——こそは世の 国・⑥世も——世は 陽・⑥あしかり——あしきこともいてき 陽・⑥あしかり
——あしくはなり 国・⑥けれど——ければ 御・⑥やう／＼——う／＼ 陽・⑥あちき——あひき 国・⑥悩
み——悩むほとにやう／＼あめのしたのあつかひ 陽・⑥悩みぐさになりて——悩みぐさにて 国・⑥引き出で
つ——引き出つ 国・⑥いと——いとと 国・⑥こと——ことも 国・⑥多かれど——多かりけれど人の御おほ
え 麥・⑥たぐひなきをたのみ——たぐひなきひとつをなくさめ 陽・⑥大納言は——ナシ陽 大納言も 国・
⑥なくなり——なくなり給 陽・⑥北の方なん——北の方ぞ 麥 北の方なんくしたまへる 国・⑥人のよしあ
る——よしある人 陽・⑥にて——まで 麥・⑥うち具しさしあたりて——なくとも 国・⑥はなやかなる御
方々にもいたう——はなやかにおや／＼うちくし給える人／＼にも 国・⑥儀式を——をりふしに 陽・⑥給ひ
けれど——給ふれと 国・⑥後見し——御後見えし 御 後見もし 陽 御見 国・⑥なほ——ナシ 国・⑥よ
りどころなく——よりところなう 陽・⑥清ら——けうら 国・⑥をのこ——をとこ 陽・⑥生まれ給ひぬい
しかと——生まれ給て 国・

⑦参らせ——参らせ給 御・⑦御子は——御子 国・⑦右大臣——右大將殿 御・⑦御かたち——御かほつき
麥・⑦よせ——世のおほえ 陽 よに心よせ 国・⑦世に——世人 陽・⑦もて——もてなし 麥・⑦きこゆれ

ど——こゆれと 御・⑦べくも——へく 御・⑦大方の——大方 国・⑦御思ひ——御もてなしはかり 陽・⑦君をば——君をそ 国・⑦私物——私の物 麥・⑦思ほしかしづき給ふ——ゆゆしうかなしきものに思ほしかしつきける 国・⑦母君——母君も 国・⑦上宮仕——うち宮仕 陽・⑦上衆めかしけれど——上衆めかしくて陽・⑦をりく——をり 国 をりをりの 御 をりをりをはしめ 陽・⑦何事に——何事につけて 国・⑦まう——さう 国・⑦さぶらはせ給ひなど——ととめさせ給 陽 候らせ給ひなど 国 さぶらはせ給はと 麥・⑦など——なに 御・⑦給ひし——給 麥・

第五類

⑤御方々——御方々は 陽・国・麥・⑤ものに——ものに思ひ 陽・御・⑤心をのみ——心を 陽・国・⑤心細げに——心細けにて 御・国・⑤御おぼえ——おほえ 国・麥・⑤おぼえなり——おほえかな 陽・国・⑥御心ばへ——御心さし 陽・国・

⑦おしなべての——おしなへて陽・麥・⑦きはには——きはにも陽・国・⑦時には——時は国・麥・

第六類

⑤更衣たち——更衣たちなと 陽 更衣たちなとまで 国・⑤上達部上人——上達天上人 御 上達部天上人 国・

⑦右大臣——右大臣との 陽 右大との 国・⑦ゆゑある事のふしぐには——ゆゑありよし／＼しきかたには 陽 ゆゑありよし／＼しき事のふしぐには 国・⑦まづ——かならず 陽・国 かならず／＼ 御・〔資料 0 ⑤・⑥・⑦〕

河内本の独自異文は一例に過ぎないが、青表紙本に対する河内本の異文十二例は、別本諸本と次のような関係で共

通異文を形成する。

(イ) 御・麥・3

(ホ) 御・2 (麥・1)

(ロ) 御・麥・陽・国・2

(ヘ) 陽・2

(ハ) 御・麥・陽・1

(ト) 国・1

(ニ) 御・麥・国・1

(一) 内はほぼ共通する異文で、上の数に対するうちわけ。算用数字は異文例の数である。以下の叙述についても同様。
共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。

御・9

陽・5

麥・7 (1)

国・4

これらの結果を総合すれば、河内本の異文は、別本系統の御物本、麥生本に最も近親性を示しているが、なお陽明文庫本にも近く、国冬本とも無関係ではないと考えるべきである(以下、これを系統論的性格第一とする)。次に青表紙本に対する別本の独自異文を集計する。二、三の異文例は明らかに誤写として除外すべきものであるが、もとの書き本に既に存在していたものか、別本を書写した当事者の誤写によるものかの判定が困難であるし、書写の態度をにわか
に論断することも困難であるから、そのまま独自異文として扱い、最終的判断の中で備考的に取りあげていくことに
する。また、「⑥清ら——けうら 国」「⑧うまれ——むまれ 河・陽」のようなものを異文とすべきかについても問
題があるように思われるが、『源氏物語大成』にならい異文として扱うことにする。集計の結果は、

国・31

御・10

陽・26

麥・9

となり、国冬本・陽明文庫本一本だけに存する独自異文が非常に多く（以下これを系統論的性格第二とする）、御物本、麥生本のほぼ三倍に達することが明らかである。次に、別本諸本の間で共通する異文とほぼ共通する異文を集計する。ほぼ共通する異文については、そのうちわけを括弧内に表す。

(イ) 国・陽・7 (3)

(ホ) (陽・国・御)・1

(ロ) 国・御・2 (1)

(ヘ) 陽・御・1

(ハ) 国・麥・2

(ト) 陽・国・麥・1

(ニ) 陽・麥・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると次のようになる。括弧内はその中に含まれるほぼ共通する異文数である。

国・13 (5)

麥・4

陽・11 (4)

御・4 (2) (資料 0)

これによれば、国冬本、陽明文庫本に共通する異文は、麥生本、御物本のほぼ三倍に達する（以下、こうした顕著な傾向を系統論的性格第三とする）。これは、河内本と共通する別本の本文的性格とは全く逆の立場に立つものである。しかも、麥生本と御物本とに共通する異文も少ない（三頁分に限っては存在しない）。両本は青表紙本に対する異文も少なく、いずれも陽明文庫本、国冬本を介して共通異文を形成する傾向が強い（以下、この傾向を系統論的性格第四とする）。この事実に近いもの、あるいはこれとは違う別の系統論的性格が、桐壺の巻の一群または全体に亘って、一般的に指摘することができるかとするれば、本文系統論の上で重大な問題を示唆することになる。以下、手沢本の頁を追って異文を分類、集計していくことにする。

⑧・⑨ 河内本の独自異文は三例。青表紙本に対する河内本の異文十五例は次の諸本と共通異文を形成する。

(資料 1)

(イ) 麥・3 (陽 1)

(ハ) 御・1

(ロ) 陽・国・御・3

(ト) 陽・御・1

(ハ) 麥・国・2

(ヲ) 陽・国・御・3 陽・1

(ニ) 麥・陽・2

(リ) 麥・国・御・陽・1

(ホ) 国・御・麥・1

共通異文数とほぼ共通する異文数とを単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

陽・10 (1)

御・7

麥・9

国・6

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・33

麥・4

陽・29

御・3

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・10 (2)

(ハ) 御・麥・1

(ロ) 国・麥・2

(ト) 陽・麥・国・御・1

系統論的性格第一から第四に至るまで、最初の三頁分と本質的に矛盾するものは存在しないが、河内本と麥生本が、他の別本諸本とのかかわりを深めながら、近親性を示している。

⑩・⑪ 河内本の独自異文は二例。青表紙本に対する河内本の異文十二例は次の諸本と共通異文を形成する。

(資料 2)

(イ) 麥・陽・国・4

(ニ) 陽・2

(ロ) 麥・陽・2

(ホ) 麥・陽・国・御・1

(ハ) 麥・国・御・2

(ヘ) 麥・御・1

共通異文数を単純化して、諸本ことに還元すると次のようになる。

麥・10 国・7

陽・9 御・4

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・28 麥・10

陽・21 御・8

別本に共通する異文数とはば共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 国・陽・6 (2)

(ハ) 国・麥・1

(ロ) 御・陽・1

この傾向は、⑧・⑨とはほとんど変わらないが、麥・御の独自異文が異常に増加する。そして、系統論的性格、第一、第三が明確さを欠くようになる。

⑫・⑬ 河内本の独自異文は、音便表記の二例。青表紙本に対する河内本の異文十九例は次の諸本と共通異文を形成する。(資料 3)

(イ) 麥・陽・8

(ホ) 国・麥・1

(ロ) 麥・4 (陽・国・1)

(ヘ) 国・麥・御・1

(ハ) 麥・陽・国・御・1

(ト) 陽・2

(ニ) 麥・陽・御・1

(チ) (陽・麥・国・御) 1

共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・17 (1)

国・5 (2)

陽・14 (2)

御・4 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・19

御・9

国・17

麥・2

別本に共通する異文数とはば共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・13 (1)

(ハ) 御・麥・1

(ロ) 国・麥・3 (1)

(ニ) 陽・国・麥・1

河内本と陽明文庫本、麥生本が異常に接近し、河内本と国冬本、御物本との共通異文が著しく少くなるほかは、ほぼ⑩、⑪と変るところがない。

⑭・⑮ 河内本の独自異文は一例であるが、青表紙本系統の横、肖、三、別本の陽・国・麥は「まとひ」、その他の青表紙本、別本の御物本は「まろひ」とあり、混態が見られるので、独自異文として扱うには問題がある。青表紙本に対する河内本の異文十八例は次の諸本と共通異文を形成する。(資料 4)

(イ) 麥・5 (陽・御・1) (陽・1)

(ウ) 御・麥・1

(ロ) 陽・麥・御・4 (国・1)

(ハ) 陽・国・1

(ニ) 陽・麥・3

(ト) 国・麥・1

(イ) 陽・国・麥・2

(フ) 陽・麥・御・国・1

共通異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・17

御・7 (1)

陽・13 (2)

国・6 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・26

御・10

国・26

麥・7

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・4 (3)

(ハ) 陽・麥・2

(ロ) 国・御・2 (1)

ここでも河内本と麥生本、陽明文庫本が異常に近親性を示し、別本の陽明文庫本、国冬本の共通異文が少くなる。

そして、両本の独自異文も減少するなど、系統論的性格(1)―(4)から離反していく傾向が見られる。

⑬・⑭ 河内本の独自異文は音便表記の三例とその他一例で四例。青表紙本に対する河内本の異文九例は、次の諸

本と共通異文を形成する。(資料 5)

(イ) 麥・4 (陽・国・1)

(ニ) 陽・御・国・1

(ロ) 麥・陽・国・2

(ホ) 麥・御・1 (陽・1)

(ハ) 麥・陽・1

共通異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・8

国・4 (1)

陽・6 (2)

御・2

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・26

御・19

国・26

麥・6

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・7 (2)

(ニ) 陽・国・御・1

(ロ) 御・陽・1

(ホ) 陽・1

(ハ) 陽・国・御・麥・1

河内本と麥生本とは異常な近親性を示している。別本との共通異文を形成する九例のすべてに麥生本が関係している。しかし、陽明文庫本、国冬文とも深くかわり、麥生本の独自異文が非常に多いのは、この部分に集中して誤写と見られる異文があらわれてくるからである。

⑭に、御物本が青表紙本・河内本との混態を示すかと見られる例が「よし勅使來て」「物思ひ知り給ふは」などに存することは「資料 4」から明らかであるが、⑩、⑪には、国冬本が、御物本、陽明文庫本と混成を示すかと思わ

れる次のような例が見られる。

(イ) 野分だちて——野分して 陽・のあきたちて 御・のあきして 国・

(ロ) 野分にいとど——野分にとりどころ 陽・のあきいたう 御・のあきいたうとりどころ 国・

これらの例は、別本諸本の関係を考えていく上でかなり重要な問題を示しているように思われる。

⑬・⑭ 河内本の独自異文は音便など表記にかかわる三例に過ぎない。青表紙本に対する河内本の異文十二例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 6)

(イ) 陽・御・麥・国・ 4

(ホ) 麥・ 1

(ロ) 陽・御・麥・ 1

(ヘ) 御・ 1

(ハ) 国・ 1 (陽・麥・ 1)

(ト) 国・ 麥・ 御・ 1 (陽・ 1)

(ニ) 陽・ 国・ 麥・ 2

(フ) 陽・ 御・ 国・ 1

共通異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・ 10 (1)

国・ 9

陽・ 10 (2)

御・ 8

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・ 18

麥・ 8

国・ 16

御・ 5

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・国・6 (2)

(ハ)陽・国・御 1

(ロ)陽・国・麥・1

別本間の異文も比較的少なく、河内本の異文が、別本の複数の諸本と重なっている。全般的に異文の少ない部分である。

②③ 河内本の独自異文は二例。青表紙本に対する河内本の異文二十例は、次の諸本と共通異文を形成する。

(資料 7)

(イ)麥・4 (陽2・御1・国1)

(ロ)麥・御・3 (陽・1)

(ハ)陽・1

(ニ)陽・国・御・麥・2

(リ)国・1 (御・麥・1)

(ホ)陽・国・麥・1

(ヌ)陽・麥・1

(ヘ)陽・御・麥・1

(ル)御・1

(ト)国・麥・1

(ヲ)御・麥・国・1

(チ)陽・御・麥・1

(ツ)国・陽・1

共通異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・16 (1)

御・11 (2)

陽・12 (3)

国・10 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・16

御・9

陽・12

麥・6

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・10 (2)

(ハ) 陽・御・国・1

(ロ) 陽・麥・2

(ニ) 御・麥・1

河内本と麥生本とは異常に近親性を示している。しかし、麥生本の独自異文も七例あり、陽明文庫本、御物本と共通する異文も見られる。この部分の河内本は、陽明文庫本、御物本、国冬本なども広く共通異文を形成している。

別本の独自異文も、国冬本に多いが、陽明文庫本、御物本との差はそれ程多くなく、系統論的性格第二及び第四とは離反していく傾向が見られる。だが、注意すべきことは、国冬本や御物本が、青表紙本、河内本と混態を生じているのではないかと見られる次のような異文が存することである。

②⑥ 堪へがたき片端をだに——片端 河、すこし 陽、すこしたに 国、かたへ 麥・

②⑪ 夜も——いたう 河、麥・いたく 陽 夜いたう 国、御・

これらの点は、別本諸本の系統的関係を明らかにする上でかなり重要な問題を示唆するように思われる。

②②・②③ 河内本の独自異文は音便表記とその他一例で四例。青表紙本に対する河内本の異文十三例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 8)

(イ) 麥・3

(ホ) 麥・御・陽・1

(ロ) 麥・御・3

(ハ) 陽・国・御・1

(イ) 麥・陽・御・国・2

(ト) 陽・1

(ニ) 麥・国・陽・1

(チ) 陽・御・1

共通異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・10 陽・7

御・8 国・4

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・13 国・8

麥・7 御・6

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・17 (7) (ニ) 陽・国・麥・1

(ロ) 御・麥・3 (ホ) 陽・国・御・1

(ハ) 陽・御・1

河内本と麥生本とは異常な近親性を示し、十三例中十例が共通異文となっている。御物本がそれらと共通異文を形成し、麥生本と御物本が単独で異文を形成しているもの三例に達する。それにもない別本全体の異文数そのものも非常に少なくなっている。系統論的性格第四とは離反しているが、第三はかえって明確に見られる。国冬本、陽明文庫本に共通する異文は長い語句の形であられるものが多く、両本の深い関係を示している。

思文閣出版では陽明文庫本十三丁ウを「思ひなす □ に」と翻訳しているが、「思ひなすよに」と判読でき、国冬本の「思ひなす」に対して陽明文庫本の本文は混態を生じているようにも見えるが、なお断定し難い。

②・③ 河内本の独自異文は存在しない。青表紙本に対する河内本の異文十四例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 9)

(イ) 御・麥・4 (陽・国・1) (陽1) (ハ) 陽・国・1

(ロ) 御・国・麥・2 (陽・1) (ト) 麥・国・1

(ハ) 陽・御・麥・2 (チ) 陽・1

(ニ) 陽・麥・御・国・2

(ホ) 陽・御・国・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・11 陽・10 (3)

御・11 国・8 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・18 御・5

陽・7 麥・3

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・8 (1) (ロ) 陽・麥・1

国冬本の独自異文が群を抜いている。また国冬本と陽明文庫本に共通する異文が顕著にあらわれている。河内本は、麥生本、御物本に異常な近親性を示すとともに、陽明文庫本や国冬本とも深い関係を見せている。更に注意すべきことは、河内本、別本の青表紙本に対する異文そのものがきわめて少ないことである。このことは、陽明文庫本と国冬本とはその原形を同じくするものであったことを示唆するもののように思われる。しかし、河内本がその異文数を減少していくなかで、別本諸本との共通異文を増加していく傾向をどのように位置づけ、理由づけていくかは、にわか

に断定すべきことではないが重大なことがらのように思われる。また、河内本と麥生本、御物本は確かに異常な近親性を示しているが、それは国冬本、陽明文庫本の側と対立する別本文文の一つの系統を保持しているようにも見える。だがこれらの問題は、最終的な資料の集計と分析を通して考えられなければならないことがらである。

②⑥・②⑦ 河内本の独自異文は二例である。

青表紙本に対する河内本の異文十三例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 10)

(イ) 御・2 (陽・1 国・2) (ト) 御・麥・国・1

(ロ) 陽・麥・国・御・1 (チ) 御・麥・1

(ハ) 国・1 (リ) 御・国・1

(ニ) 陽・2 (ヌ) 御・陽・国・1

(ホ) 陽・麥・1 (ル) 御・陽・国・麥・1

(ヘ) 陽・国・麥・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

陽・8 (2) 国・9 (3)

麥・7 (1) 御・8 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・14 麥・8

陽・9 御・6

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

吉岡廣氏は、「大液芙蓉ありけめ」(以下略)とされ、

引用部分に関する限り国冬本と類似他本と認定せざるをえないが、省略した部分に「河御Ⅱをみなへしの、陽国Ⅱおはなの」という重要な異同があつて、この長文全体ではむしろ御物本の本文を類似他本と考えるべきかもしれない。(岩波書店「文学」昭59・1月号 35頁)

と指摘されているが、「資料 10」によれば、国冬本は陽明文庫本の側に近親性を示し、しかも、「のいろあひも」「けふらに」「らうたけなりし」の異文によって、御物本、河内本と混成、混態を示していることが明確である。別本に共通する異文、ほぼ共通する異文の第五類、第六類からも、陽明文庫本と国冬本とは近親性を示していて、国冬本を類似他本と認定すべきではない。この長文全体は、御物本に誤写または依拠本文に存したと思われる「げに——風」「けはひを——けはひの恋しさを」の独自異文が存するほかは、御物本と河内本の本文は同じであり、同一系統の本文に属するものであつたことは明らかである。陽明文庫本には「をはな」の表記(「大成」は「おはな」とする)などが見られる。本文にかなりの欠落部分を存するが、「資料 10」第三類 ㉗、㉘、㉙ から、陽明文庫本と国冬本とは同一系統の本文を原形とするものであつたと考えなければならない。河内本の異文と共通する別本の本文のみを対校して、河内本との系統論的性格を論ずることは、別本そのものの本文的性格から考えて適切な本文批判の方法、処理の方法ではない。この方法は、源氏物語絵詞の本文系統を明らかにする上で試みた方法であり、従来、こうした文献学的処理にとどまるものであつたが、その系統論的性格を明らかにしていく上では、更に精確、多大な労力を費しての全体的、総合的調査を経なければならないと考えている。

この部分は、長文の異文を除くと、河内本の独自異文も非常に少なく、別本諸本間の本文の異同もさして多くはな

い部分である。だが、吉岡氏も言われているように、河内本と別本の本文を識別する重要な異文が存するところである。このことは既に池田博士の指摘されるところであった。だが、青表紙本、河内本に対して別本は如何なる系統論的關係に立つものであるかは池田博士が明らかにされた研究史的事実とはまた別の視点から考えられなければならない問題をもっているように思われる。

㉔・㉕ 河内本の独自異文は二例である。青表紙本に対する河内本の異文十四例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 11)

(イ)陽・御・麥・3

(ハ)麥・1

(ロ)陽・国・麥・2

(ト)国・陽・1

(ハ)御・麥・2 (陽・国・1)

(チ)陽・1

(ニ)御・国・麥・1

(リ)国・1

(ホ)陽・国・1

(ヌ)麥・陽・御・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・10 (1)

国・7 (3)

陽・10 (3)

御・7 (1)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・29

御・8

国・26

麥・4

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・国・9 (3)

(イ)国・御・1

(ロ)国・麥・1

この部分の青表紙本に対する河内本の異文は、十三例ではあるが、語の形であられるものが多く、手沢本の校合の結果の色取りも比較的単純である。系統論的性格第一から第四に本質的に矛盾し離反する傾向は見られないが、第三の国冬本、陽明文庫本の近親性は第五類第六類の資料によって更に強化される傾向を示している。ただ、性格第一においては、御物本、麥生本との近親性とともに、陽明文庫本との近親性も見られ、陽明文庫本は独自異文も多く、しかも国冬本との近親性も強い。この部分に関するかぎりは、別本に二つの系統論的系譜を認めることは困難であり、河内本、別本は同一祖本から発生、伝来したと想定すべきもののように思われる。ただ、多少別本系統に二つの系統論的系譜の存在を示す傾向も見られる。こうした事実を如何に解釈すべきかは、全体的な異文の集計の結果を分析してみ必要がある。

⑩・⑪ 河内本の独自異文は一例である。青表紙本に対する河内本の異文二十六例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 12)

(イ)麥・4

(イ)御・陽・麥・3 (国・1)

(ロ)陽・2

(ロ)陽・国・3 (御・麥・1)

(ハ)御・1 (陽・麥・1)

(ハ)麥・陽・2 (国・1)

(ニ)御・麥・6 (国・1)

(リ)御・麥・国・1 (陽・1)

(ホ)麥・御・国・陽・3

(ヌ)陽・麥・国・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・22 (2)

御・15 (1)

陽・16 (2)

国・11 (3)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

陽・23

御・8

国・12

麥・6

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・9 (2)

(二) 陽・国・麥・1

(ロ) 御・国・麥・2

(ホ) 陽・御・1

(ハ) 国・御・2

(ヘ) 御・麥・1

この部分については系統論的性格第一から第四に本質的に矛盾する事実は存在しない。ただ、陽明文庫本の独自異文が断トツしていることと、別本に共通する異文は陽明文庫本と国冬本に多いが、国冬本は御物本、麥生本とも近親性を示していることが注意される。別本諸本の本文系統的性格が、このように錯綜してくると、陽明文庫本、国冬本の系統に対立する御物本、麥生本という性格が失われ、河内本と麥生本とが非常に近親性を示してくる事実をどのように理解すべきであろうか。総合的な分析を通して考えていかなければならないことではあるが、こうした事実は、本文の系統的關係を知る上で、かなり重要な資料を提示しているように思われる。

③・③ 河内本の独自異文は二例である。青表紙本に対する河内本の異文二十三例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 13)

(イ) 陽・5

(ロ) 陽・麥・4

(イ) 麥・3 (御・1)

(チ) 御・1

(ニ) 御・麥・国・2 (陽・1)

(リ) 陽・御・1

(ホ) 陽・麥・国・2

(ヌ) 陽・御・麥・1

(ヘ) 陽・国・麥・御・2

(ル) (麥) 1

(ト) 御・麥・2 (陽・1)

共通異文数とほぼ共通する異文数を、諸本ごとに還元すると次のようになる。

陽・17 (2)

御・11 (1)

麥・17 (1)

国・6

別本諸本の独自異文数は次のごとくである。

国・24

麥・6

陽・15

御・5

別本諸本は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・7

(ロ) 国・麥・1

この部分は系統論的性格第一と本質的に矛盾するものではないが、やはり河内本と陽明文庫本、麥生本の異常な近親性が注意される。第二、第三、第四の系統論的性格はほぼ指摘することができる。国冬本には独自異文が多く存在するが、河内本は、陽明文庫本に最も近親性を示しながら、麥生本、御物本とも深い系統論的關係に立っている。そして、国冬本の独自異文の三分の一程度は陽明文庫本と共通異文を形成している。「資料 13」から指摘できる事実
は、以上の点に要約することができる。

③・⑤ 河内本の独自異文は六例であるが、音便など表記に関わるものがほとんどである。青表紙本に対する河内本の異文三十二例は、次の諸本と共通異文を形成する。(一) はほぼ共通する異文であることを示す。(資料 14)

(イ) 御・麥・陽・5

(ト) 陽・国・1

(ロ) 御・麥・8 (陽3・国2)

(チ) 国・1

(ハ) 麥・3 (国・陽・1)

(リ) (陽・麥) 1

(ニ) 陽・麥・3

(ヌ) 陽・国・麥・御・6

(ホ) 国・麥・3 (陽・1)

(ル) (陽) 1

(ヘ) 陽・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を、諸本ごとに還元すると次のようになる。

麥・28

御・20 (1)

陽・21 (5)

国・14 (3)

別本諸本の独自異文数は次のごとくである。

陽・22

麥・9

国・20

御・7

別本諸本は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・10 (2)

(ハ) 御・陽・国・麥・1

(ロ) 御・国・1

この部分は、系統論的性格第一から第三までの性格と本質的に矛盾するものは存在しない。ただ、河内本は麥生本、

陽明文庫本、御物本の別本三本に共通する異文が多く、系統論的に非常に近いことを示している。だが、第二の性格も明確で、陽明文庫本、国冬本の独自異文も多く、両本に共通する異文もまた顕著である。さらにまた、第三の性格も明確にあらわれている。ただ、第二類⑤の「と」「ねむごろに」「聞えさせ」の異文には、国冬本が陽明文庫本と河内本とに混成する本文を持っている。また、⑤「聞えさせ」「給ひけり」の異文には、国冬本が、河内本、別本、青表紙本に混成する本文を持っている。そして、国冬本の異文は、陽明文庫本の異文に次いでかなり多くなっている。この事実をどう解釈するかは本文の系統論的性格を明らかにしていく上でかなり重要な問題を示唆しているように思われる。だが、こうした問題も、やはり桐壺巻全体の異文の分析を通して帰納すべきことがらである。

河内本が麦生本と近親性を示していることは事実であるが、麦生本一本のみと近親性を示しているだけではない。この部分は、別本諸本が河内本と複数の形で共通異文を形成している。本文系統を考えていく上で、こうした事実を欠落させることは、きわめて恣意的な結論を導き出すことになるように思われる。

③⑥・③⑦ 河内本の独自異文は五例である。音便など表記にかかわるもののうち三例である。青表紙本に対する河内本の異文三十三例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 15)

- | | |
|-----------------|-------------|
| (イ) 麥・7 (陽・1) | (ト) 御・2 |
| (ロ) 麥・国・6 (陽・2) | (チ) 陽・麥・国・1 |
| (ハ) 麥・御・4 | (リ) (陽・麥) 2 |
| (ニ) 陽・国・3 (麥・2) | (ヌ) 国・御・麥・1 |
| (ホ) 陽・麥・4 (国・1) | (ル) (麥) 1 |
| (ヘ) 陽・2 (麥・1) | |

共通異文数とほぼ共通する異文数を、諸本ごとに還元すると次のようになる。

麥・29(6) 国・12(1)

陽・15(5) 御・7

別本諸本の独自異文数は次のごとくである。

国・25 御・8

陽・23 麥・7

別本諸本は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ)陽・国・14(4) (ハ)御・国・1

(ロ)陽・麥・2 (ニ)陽・国・麥・1

この部分は「資料 12の」「今は内裏にのみさふらひ給ふ」あたりから見られた異文の増加、系統的な錯綜が目立つ部分である。青表紙本に対する河内本や別本の異文は、ある部分に多く、ある部分には少ないというように、比較的物語の部分、物語群ともいうべきものに深くかわるるように存在している。この事実、河内本と陽明文庫本とを対校した拙論「源氏物語 夕顔の巻疏注」(本誌創刊号)で、夕顔の巻の本文的性格として明らかにし得たが、別本諸本を校合することによって、この事実は桐壺の巻についても指摘することができるとは思われる。このことは、源氏物語の本文と物語の享受の問題を考えていく上で、かなり重要な示唆を与えるもののように思われる。

この部分も、系統論的性格第一から第三の本文性格と本質的に矛盾する事実は存在しない。しかし、麥生本、御物本に対する国冬本、陽明文庫本という二つの系統論的關係を指摘することはこれらの部分からは困難になっているように見える。それにもかかわらず、陽明文庫本と国冬本に共通する異文は十例、ほぼ共通する異文は四例で、その深

い系統的關係を見せている。

吉岡曠氏が指摘されるように、河内本と麥生本とはこの部分でも異常な近親性を示している。そして、その事実だけを中心に置いて考えるならば、両本は同じ祖本をもとに成立したものと言い得るようにも思われる。しかし、源氏物語の本文が既に校合による混成、混態の過程を経て現存諸本が成立、形成されてきたこと、陽明文庫本、国冬本とも深くかわり、更には御物本とも關係あること、などを考えなければならぬとすれば、そうした推論にはにわかに従い難いものがある。③⑥「え恥ぢあへ」とある青表紙本の本文に対して、河内本及び別本の麥生本は「ましてえかくれあへさせ」とある。陽明文庫本は「ましてえかくれあえ」、国冬本は「ましてえはちあへ」、御物本は「はしてえかくれあえさせ」となっている。この部分についての混成、混態の実態を考えるならば、国冬本は、青表紙本に最も近いが、別本との混成が見られる。陽明文庫本は河内本、麥生本に最も近く、御物本は、青表紙本、河内本と混態を示し、別本とも混成を示していることになる。しかし、源氏物語の本文的性格とその系統論的性格は、そうした部分の調査、検討からだけでは明らかにし得るものではないのである。そして、そうしたかわり方のなかに、源氏物語の本文系統論上の本質的な問題が存在すると考えるべきである。

③⑧・③⑨ 河内本の独自異文は三例である。③⑧「なりとにや」には、陽明文庫本に「なりとて」と類似異文に近いものが見られる。音便など表記にかかわるものが一例ある。青表紙本に対する河内本の異文二十八例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 16)

(イ) 麥・5 (陽・国・1)

(ロ) 麥・陽・国・5

(ハ) 陽・3

(ニ) 麥・国・2 (陽・1)

(ホ) 陽・御・麥・国・2

(ヘ) 麥・御・2

(ト) 御・2

(又) 国・2

(フ) 陽・麥・2

(ル) 陽・国・1

(リ) 陽・麥・御・1

(ヲ) 麥・御・国・1

共通異文数とほぼ共通する異文数を、諸本ごとに還元すると次のようになる。

麥・20

陽・16 (2)

国・14 (1)

御・8

別本諸本の独自異文数は次のごとくである。

国・21

御・15

陽・17

麥・11

別本諸本は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・11 (2)

(ハ) 陽・麥・1

(ロ) 陽・御・2

(ニ) 御・麥・1

この部分は㊸と㊹では異文の様態にかなりの変化が見られる。㊸は、前頁と同じようになり多くの異文が存在し、青表紙本に対する河内本の異文も、㊹とはほぼ二倍に達する。ところが、㊹の様態は、㊺、㊻にそのままうけ継がれていく。こうした異文の存在、様態をどのように考えていくかは、やはり全体の集計、分析を経て考えられていかなければならないが、大きな一つの示唆を与えるものだといわなければならない。

河内本に最も近親性を示しているのは麥生本であるが、陽明文庫本や国冬本ともやはりかなり深い関係がある。そして、御物本とも無関係ではない。これは、系統論的性格、第一に相反する傾向で、このような傾向があらわれてく

ると、第二、第三の性格もやはり相反し離反していくようになる。こうした事実は、系統論的に何を意味しているのか、やはりもっと考えられていいことのように思われる。

御物本の独自異文には、誤写によるものか、底本となった本文に既に存在したものかは明確ではないが、④⑩にうけ継がれていく。御物本のこうした本文の性格は、別の資料からも指摘したことがあるが、注意しなければならないことのように思われる。

④⑩・④⑪ 河内本の独自異文は二例である。一例は音便の表記、一例は河内本の誤写と見られるものである。青表紙本に対する河内本の異文二十三例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 17)

(イ) 陽・麥・国・5

(ハ) 陽・御・麥・国・2

(ロ) 御・麥・4 (国・陽・1)

(ト) 陽・御・麥・2

(ハ) 麥・2 (国・陽・1)

(チ) 陽・御・国・1

(ニ) 陽・麥・2

(リ) 御・国・麥・2

(ホ) 陽・2

(ヌ) (陽・麥) 1

共通異文数とほぼ共通する異文数を単純化して諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・20 (1)

国・14 (2)

陽・17 (3)

御・9

別本一本のみに存する異文数は、次のようである。

国・25

御・11

陽・13

麥・6

別本諸本は、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・麥・2

(二) 御・陽・麥・1

(ロ) 陽・御・国・2

(ホ) 陽・国・1

(ハ) 御・国・麥・1

この部分の本文的性格については既に「資料 16」で指摘したが、河内本と麥生本とが共通異文を形成して最も近親性を示しているという考え方を否定する部分である。河内本は、麥生本、陽明文庫本、御物本、国冬本などの複数の本文をからませながら共通異文を形成している。そして、別本諸本で共通異文を形成する場合も、系統論的性格第三の国冬本と陽明文庫本に共通異文が多いこと、第四の麥生本と御物本には共通異文が少なく、二本は陽明文庫本、国冬本を介して共通異文を形成するという本文的性格をも否定する傾向が見られる。この部分では、資料分類第一類から第三類の結果を、第四類から第六類が補う形で補足実証していることになる。系統論的性格第一から第四は、少なくともこうした形で否定されているのである。

御物本には「そひふし」が「そひふ」「ながはし」が「ながは」と、「し」を脱落させた表現が④⑩、④⑪に見られ、一つの傾向を示しているように思われる。

諸本による本文の異同も③⑨の傾向をうけて比較的少ない部分であるが、そうした事実がまた本文的性格の上にも密接にあらわれていると考えるべきであり、こうしたことがらは、やはり本文の系統論的性格を考えていく上で一つの大きな示唆を与えているものといわなければならない。

④⑫・④⑬・④⑭ 河内本の独自異文は十例である。青表紙本に対する河内本の異文三十八例は、次の諸本と共通異文を形成する。(資料 18)

(イ) 麥・陽・国・6

(ハ) 麥・国・4

(ロ) 陽・4 (麥・1)

(ト) 麥・御・国・2

(ハ) 麥・4 (陽・2・御・国・1)

(チ) 麥・国・2

(ニ) 麥・御・4 (陽・国・1)

(リ) 麥・陽・御・国・2

(ホ) 麥・御・陽・5

(ヌ) 陽・御・2

(ル) 国・1 (陽・麥・1)

(ワ) (陽・御・麥・国) 1

(ヲ) (陽・麥) 1

共通異文数とほぼ共通する異文数とを単純化して、諸本ごとに還元すると、次のようになる。

麥・31 (4) 国・18 (3)

陽・27 (6) 御・19 (2)

別本一本のみに存する異文数は次のようである。

国・24 麥・11

陽・20 御・9

別本に共通する異文数とほぼ共通する異文数とは、次のような関係で共通異文を形成する。

(イ) 陽・国・14 (3) (ハ) 御・麥・1

(ロ) 陽・御・2 (ニ) 御・国・1

この部分は「資料 17」に比較すると、河内本の青表紙本に対する異文が多少多く見られるが、麥生本が河内本と共通異文を形成する百分率は、七六・九%に達する。しかし、陽明文庫本も六四・一%、国冬本四三・六%、御物本

四一%と、別本系諸本も河内本と共通する異文が多く見られる。別本の独自異文は、国冬本、陽明文庫本に多いが、麥生本にもかなり多く見られる。共通異文は、やはり国冬本と陽明文庫本が断トツである。

資料 ④ 「はなやかなるに」は、御物本「物あさやかなるに」、国冬本「ものあさやかにはなやかなるを」となっている。国冬本には混成、混態が見られる。更に国冬本は、④⑤「御方々の人々」によっても、陽明文庫本、青表紙本などの混成、混態を示していることがわかる。

別本諸本の共通異文から見ると、陽明文庫本と国冬本との近親性はやはり否定することはできない。だが、河内本との共通異文という点から見ると、陽明文庫本は国冬本よりも麥生本と近親性を示している。こうした諸本の近親關係をいかに考えるべきであろうか。やはりそれは、桐壺の巻の全体的な集計と分析の上に立つて、帰納されなければならないことである。

以上、桐壺の巻を「0」から「18」の十九の資料に分け、異文を調査、分類してきたが、次にそれらを集計、分析しながら、別本諸本の本文系統について考察を加えていくことにする。

3

最初に資料の集計を二種類に分類して示す。集計「(Ⅰ)」は異文数と最下段は全体的、総合的な百分率を、「(Ⅱ)」は箇々の異文数を百分率で表わしたものであるが、吉岡曠氏との異文数の違いは、文節中心の統計と、青表紙本に対する河内本の異文を単位とする統計、青表紙本に対する別本の異文を単位として、別本諸本の本文の異同を考慮しての統計という視点の相違で、両者の異文に対する考え方の若干の相違にも起因するが、本質的には意図の違いは見られない。

資料 018 集計 (I)

陽・御	麥・陽	麥・国	陽・国・御	麥・	国・	御・麥・国	御・麥・陽	御・	陽・	御・麥・陽・国	御・麥	御物本	国冬本	陽明文庫本	麥生本	(口)第二・三類	(イ)第二類	分類	資料 No
					1	1	1	2	2	2	3	9	4	5	7(1)	12	1	0	
1	2	2	3	3		1		1	1	1		7	6	10(1)	9	15	3	1	
	2					2			2	1	1	4	7	9	10	12	2	2	
	8	1		4		1	1		2	1		4(1)	5(2)	14(2)	17(1)	19	2	3	
	3	1		5			4			1	1	7(1)	6(1)	13(2)	17	18	1	4	
	1		1	4							1	2	4(1)	6(2)	8	9	4	5	
			1	1	1	1	1	1		4		8	9	10(2)	10(1)	12	3	6	
	1	1	1	4	1	1	1	1	1	2	3	11(2)	10(1)	12(3)	16(1)	20	2	7	
1			1	3			1		1	2	3	8	4	7	10	13	4	8	
		1	1			2	2		1	2	4	11	8(1)	10(3)	11	14		9	
	1		1		1	1		2	2	1	1	8(1)	9(3)	8(2)	7(1)	13	2	10	
				1		1	3				2	7(1)	7(3)	10(3)	10(1)	14	2	11	
	2			4		1	3	1	2	3	6	15(1)	11(3)	16(2)	22(1)	26	1	12	
1	4			3		2	1	1	5	2	2	11(1)	6	17(2)	17(1)	23	2	13	
	3	3		3	1		5		1	6	8	20(1)	14(3)	21(5)	28	32	6	14	
	4	6		7		1		2	2		4	7	12(1)	15(5)	29(6)	33	5	15	
	2	2		5	2	1	1	2	3	2	2	8	14(1)	16(2)	20	28	3	16	
	2		1	2		2	2		2	2	4	9	14(2)	17(3)	20(1)	23	2	17	
2	2	4		4	1	2	5		4	2	4	19(2)	18(3)	27(6)	31(4)	38	10	18	
5	37	21	10	52	8	20	31	13	31	33	48	175	168	243	299	374	55	計	
1.3	9.8	5.6	2.6	13.9	2.1	5.3	8.2	3.4	8.2	8.8	12.8	46.8	44.9	65.0	79.9		14.7	%	

陽・御	国・麥	国・御	国・陽	(二)第五・六類	麥・	御・	陽・	国・	(ハ)第四類	(陽・麥)	(麥)	(麥・陽・御)	(国)	(陽)	(国・陽)	(陽・国・御・麥)	御・国	陽・国	麥・陽・国
1	2	2(1)	7(3)	15	9	10	26	31	76										
	2		10(2)	14	4	3	29	33	69										
1	1		6(2)	8	10	8	21	28	67										4
	3(1)		13(1)	18	2	9	19	17	47							1			
		2(1)	4(3)	7	7	10	26	26	69								1	2	
1			7(2)	11	6	19	24	24	73										2
			6(2)	8	8	5	18	16	47										2
			10(2)	14	6	9	12	16	43									1	2
1			17(7)	23	7	6	13	8	34										1
			8(1)	9	3	5	7	18	33									1	
1			5(1)	6	8	6	9	14	37							1	1		1
	1		9(3)	11	4	8	29	26	67			1	1	1	1			1	2
1		2	9(2)	16	6	8	23	12	49									3	1
	1		7	8	6	5	15	24	50		1								2
		1	10(2)	12	9	7	22	20	58	1				1				1	
		1	14(4)	18	7	8	23	25	63	2	1							3	1
2			11(2)	15	11	15	17	21	64									1	5
				7	6	11	13	25	55	1									5
2		1	14(3)	18	11	9	20	24	64	1						1			6
10 4.2	10 4.2	9 3.7	167 70.1	238	130 12.1	161 15.0	368 34.4	410 38.3	1065	5 1.3	2 0.5	1 0.2	1 0.2	2 0.5	1 0.2	3 0.8	1 0.2	12 3.2	36 9.6

御	麥	陽	国	付第五・六類を諸本に還元	(陽・国)	(国・御)	(陽)	(陽・麥)	(陽・国・御)	御・陽・麥	国・御・麥	陽・御・国	陽・麥	陽・麥・御・国	御・麥	陽・国・麥
4(2)	4	11(4)	13(5)					1	1							1
2	4	11(2)	13(2)											1	1	
1	1	7(2)	7(2)													
1	5(1)	14(1)	17(2)												1	1
2(1)	1	5(3)	6(4)									1				
3(1)	1	11(4)	9(3)				1		1					1		
1(1)	1	8(3)	8(3)						1							1
2	3	13(2)	11(2)									1	2		1	
5	4	20(7)	19(7)									1			3	1
	1	9(1)	8(1)										1			
1		6(1)	5(1)													
1(1)	1	9(3)	11(4)				1									
6	4	11(2)	14(2)								2				1	1
	1	7	8													
2	1	11(2)	12(2)											1		
1	3	17(4)	16(4)										2			1
3	2	14(2)	11(2)										1		1	
3	4	6(1)	3(1)		i					1		2	2			1
4	1	16(3)	15(3)	(238)											1	
42	43	206	206	497	1	1	1	1	3	1	2	4	9	3	9	7
17.6	18.1	86.6	86.6		0.4	0.4	0.4	0.4	1.2	0.4	0.8	1.6	3.7	1.2	3.7	2.9

資料 018 集計(Ⅱ)

陽・御	麥・陽	麥・国	陽・国・御	麥・	国・	御・麥・国	御・麥・陽	御・	陽・	御・麥・陽・国	御・麥	御物本	国冬本	陽明文庫本	麥生本	(口)第二・三類	(イ)第一類	分類	資料 No
					8.3	8.3	8.3	16.7	16.7	16.7	25.0	75.0	33.3	41.7	58.3	3.2	1.8	0	
6.7	13.3	13.3	25.0	25.0		6.7		6.7	6.7	6.7		46.7	40.0	66.7	60.0	4.0	5.4	1	
	16.7					16.7			16.7	8.3	8.3	33.3	58.3	75.0	83.3	3.2	3.6	2	
	42.1	5.3		21.0		5.3	5.3		10.5	5.3		21.0	26.3	73.6	89.4	5.0	3.6	3	
	16.7	5.6		27.8			22.2			5.6	5.6	38.8	33.3	72.2	94.4	4.8	1.8	4	
	11.1		11.1	44.4							11.1	22.2	44.4	66.6	88.8	2.4	7.2	5	
			8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3		33.3		66.6	75.0	83.3	83.3	3.2	5.4	6	
	5.0	5.0	5.0	20.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	10.0	15.0	55.0	50.0	60.0	80.0	5.3	3.6	7	
7.7			7.7	23.1			7.7		7.7	15.4	23.1	61.5	30.7	53.8	76.9	3.4	7.2	8	
		7.1	7.1			14.3	14.3		7.1	14.3	28.6	78.5	57.1	71.4	78.5	3.7		9	
	7.7		7.7		7.7	7.7		15.4	15.4	7.7	7.7	61.5	69.2	61.5	53.8	3.4	3.6	10	
				7.1		7.1	21.4					14.3	50.0	50.0	71.4	71.4	3.7	3.6	11
	7.7			15.4		3.8	11.5	3.8	7.7	11.5	23.1	57.7	42.3	61.5	84.6	6.9	1.8	12	
8.7	17.4			13.0		8.7	4.3	4.3	21.7	8.7	8.7	47.8	26.1	73.9	73.9	6.1	3.6	13	
	9.4	9.4		9.4	3.1		15.7		3.1	18.8	25.0	62.5	43.8	65.6	87.5	8.5	10.9	14	
	12.2	18.1		21.2		3.0		6.1	6.1		12.1	21.2	36.4	45.5	87.9	8.8	5.4	15	
	7.1	7.1		17.9	7.1	3.6	3.6	7.1	10.7	7.1	7.1	28.6	50.0	57.1	71.4	7.4	5.4	16	
	8.7		4.3	8.7		8.7	8.7		8.7	8.7	17.4	39.1	60.8	73.9	87.0	6.1	3.6	17	
5.3	5.3	10.5		10.5	2.6	5.3	13.2		10.5	5.3	10.5	50.0	47.4	71.5	81.6	10.1	18.1	18	

陽・御	国・麥	国・御	国・陽	(二)第五・六類	麥・	御・	陽・	国・	(ハ)第四類	(陽・麥)	(麥)	(麥・陽・御)	(国)	(陽)	(国・陽)	(陽・国・御・麥)	御・国	陽・国	麥・陽・国・
6.7	13.3	13.3	46.7	6.3	11.8	13.2	34.2	40.8	7.1										
	14.3		71.4	5.9	5.8	4.3	42.0	47.8	6.5										
12.5	12.5		75.0	3.4	14.9	11.9	31.3	41.8	6.3										33.3
	16.7		72.2	7.6	4.3	19.1	40.4	36.2	4.4							5.3			
		28.6	57.1	2.9	10.1	14.5	37.7	37.7	6.5									5.6	11.1
9.1			63.6	4.6	8.2	26.0	32.9	32.9	7.2										22.2
			75.0	3.4	17.0	10.6	38.3	34.0	4.4										16.7
			71.4	5.9	14.0	20.9	27.9	37.2	4.0									5.0	10.0
4.3			73.9	9.7	20.6	17.6	38.2	23.5	3.2										7.7
			88.9	3.8	9.0	15.1	21.2	54.5	3.1									7.1	
16.7			83.3	2.5	21.6	16.2	24.3	37.8	3.5							7.7	7.7		7.7
	9.1		81.8	4.6	6.0	11.9	43.3	38.8	6.3			7.1	7.1	7.1	7.1			7.1	14.3
6.3		12.5	56.3	6.7	12.2	16.3	46.9	24.5	4.6									11.5	3.8
	12.5		87.5	3.4	12.0	10.0	30.0	48.0	4.7		4.3								8.7
			8.3	83.3	5.0	15.5	12.1	37.9	34.5	5.4	3.1				3.1			3.1	
			5.6	77.8	7.6	11.1	12.7	36.5	39.7	5.9	6.1	3.0						9.0	3.0
13.3			73.3	6.3	17.2	23.4	26.6	32.8	6.0									3.6	17.9
					2.9	10.9	20.0	23.6	45.5	5.1	4.3								21.7
11.1		5.6	77.8	7.6	17.2	14.1	31.3	37.5	6.0	2.6						2.6			15.8

御	麥	陽	国	(附第五・六類を諸本に還元)	(陽・国)	(国・御)	(陽)	(陽・麥)	(陽・国・御)	御・陽・麥	国・御・麥	陽・御・国	陽・麥	陽・麥・御・国	御・麥	陽・国・麥
26.7	26.7	73.3	100					6.7	6.7							6.7
14.3	28.6	78.6	92.9											7.1	7.1	
12.5	12.5	87.5	87.5													
5.6	27.8	77.8	94.4												5.6	5.6
28.6	14.3	71.4	85.7										14.3			
27.3	9.0	100	81.8				9.1		9.1					9.1		
12.5	12.5	100	100						12.5							12.5
14.3	21.4	92.9	78.6									7.1	14.3		7.1	
21.7	17.4	87.0	82.6									4.3			13.0	4.3
	11.1	100	88.9										11.1			
16.7		100	83.3													
9.0	9.0	81.8	100			9.1										
37.5	25.0	68.8	87.5								12.5				6.3	6.3
	12.5	87.5	100													
16.7	8.3	91.7	100											8.3		
5.6	16.7	94.4	88.9										11.1			5.6
2.0	13.3	93.3	73.3										6.7		6.7	
42.9	57.1	85.7	42.9		14.3				14.3		28.6	28.6				14.3
22.2	5.6	88.9	83.3												5.6	

第二類は河内本の独自異文で、音便など表記にかかわるものを含め、読み得た異文例は五十五例で、「集計（Ⅰ）」は異文数とその合計及び百分率を、「（Ⅱ）」は、独自異文数の合計に対する各資料の百分率を示した。資料「0」と「18」は手沢本のほぼ三頁分弱、その他の資料は二頁分である。異文の分布状態は0%から18・1%まで、部分によ

つてかなりの違いが見られるが、これについては吉岡曠氏に仔細な本文批判、検討を加えられた詳論がある。しかし、「本文の異同を実態に即して把握するためには、異同箇所単位の考察よりも文単位での考察の方がはるかに有効かつ現実的なのである」(岩波『文学』 昭59年1月号 37頁)とされるのは、本文の系統を考えていくに当ってはいかがなものであるうか。後人の手の入り易さ、注目され易さという点もあって、にわかに従い難いことのように思われる。意識の加わらない部分に、その本文系統の証跡がかえって残されているという事実も重要であり、虚心な本文異同の集積にこそ本来の姿を読みとり得るといふ点も見がしてはならない。音便など、表記にかかわるものを除いた次の二十六例は、その意味の軽重はともかくとして、やはり独自異文として考えるべきである。

⑥ いにしへの——いにしへ・⑨ まさなき——さかなき・⑨ 戸——戸とも・⑨ 奉りし——き給し・⑩ 物を——物・
⑪ 入らせ——入りゐさせ・⑭ 惑ひ——まろひ・⑰ 侍りけれ——いへりけれ・⑳ 堪へがたき——ナシ・㉑ 片端をだに——片端・㉒ はつる——侍・㉓こそ——こそは・㉔ 給へれば——給へは・㉕ 世の人——世人・㉖ べきだに——へき・㉗ 定めなき——定めかたさ・㉘ 御心——御心なと・㉙ 常に——つるに・㉚ ゆゑ——ゆゑに・㉛ なれば——なりとにや・㉜ さまに——さまにそ・㉝ まかでさせ給ふ——まかてさてたてまつり・㉞ いと——またいと・㉟ かしづき——いとかなしくし・㊱ 給へり——たてまつりて・㊲ あはひ——あそひ・

また、ほぼ共通する異文として「共通」に属させた (四) 第二・三類の末尾の「陽・国・御・麥・」以下「陽・麥」に至る十四例についても、独自異文としての面についても考慮すべきである。これらの独自異文の存在は、吉岡氏も指摘されているように、「河内本が勝手に作り出していったのではなく、河内本の校訂に用いられた「二十一部の古写本のいずれかの本文に拠ることを校訂の原則にしたこと、その原則を」「想像以上に忠実に遵守した」結果であると考えなければならない。このように、河内本の独自異文のうちの二十六例と、ほぼ共通する十四例の異文の

うちのあるものは、やはり河内本の独自異文として考慮されなければならない。

次に、河内本と共通する別本の異文とほぼ共通する異文の総数は三百七十四例であるが、「集計」の「(四)第二・三類」の麥生本、陽明文庫本、国冬本、御物本は、「御・麥」以下「陽・麥」に至る二十二の具体的に存在する異文を、抽象化し単純化して諸本ごとに還元したもので、「(一)」で異文数を「(II)」で百分率を示した。「(一)」で示したものは、第三類、河内本の異文が別本諸本とほぼ共通する異文であることを示す。「(四)」の百分率は、第二・三類の異文総数に対する百分率で、麥生本以下御物本四本の百分率は、同一資料内における河内本との共通異文数とほぼ共通する異文数との百分率である。吉岡氏は、主として文節を重視される異文の数え方によられているので、青表紙本と河内本とが対立する異文数は四百四十五箇所とされる。そのうち、河内本の独自異文三〇箇所を引いた部分について、四別本のそれぞれの距離を測定され、

国冬本・御物本・陽明文庫本・麥生本の順序で河内本に近づいていくが、一致箇所数全体でも、一本のみの一致箇所数でも、麥生本が他の三本と段ちがいに河内本と接近することがここでも証明される。特に麥生本一本のみとの一致箇所数が七三箇所と第二位の御物本一九箇所の四倍弱もあることは注目に値する。「河内本」「桐壺」の

巻の校訂過程(上) 岩波「文学」(昭59・1月号 37頁)

と指摘されている。そして、「異同箇所を単位とする数値が必ずしも異同の実態を正確には反映しないこと」、「異同箇所単位の考察よりも文単位の考察の方がはるかに有効かつ現実的」であるといわれ、そうした立場からの本文批判を試みられている。だが、既に述べたように、この指摘には問題がないわけではない。氏は音便、仮名遣い等表記にかかわる異文は考慮に入れられていないが、本文批判の方法と本文系統論樹立のための異文処理の方法との間には、やはり相違がなければならない。確かに異文の意味上の軽重・考慮も必要ではあるが、そうした表記のし方のなかに、

時代や系統論上の關係を示唆するものもあり、対校の対象としないことには、にわかに従い難いものがあるように思う。河内本と別本諸本一本のみと共通する異文数は次のごとくである。(一)内の数値は第三類の異文数のうちわけを、「」内の数値は第二・三類の総数に対する諸本の異文数の百分率である。

麥生本	陽明文庫本	御物本	国冬本
54 (2) [14.4]	33 (2) [8.8]	13 (3) [3.5]	9 (1) [2.4]

麥生本一本のみと共通する第二・三類の異文数は五十四例、一帖全体の異文数に対する百分率は一四・四%に過ぎない。ところが、河内本と別本諸本が複数の形で共通異文を形成しているものを、諸本ごとに抽象的に単純化して還元した異文数を上段に、共通異文第二・三類の総数に対する百分率を下段に示すと次のようになる。(資料「I」・「II」)

麥生本	陽明文庫本	御物本	国冬本
299 79.9	243 65.0	175 46.8	168 44.9

これによれば、青表紙本に対する河内本の異文は、別本諸本に七九・九、六五・〇、四六・八、四四・九%の順にかなり高い百分率で共通異文を形成している。これは、河内本の独自異文を加えた河内本の青表紙本に対する異文総数に対する百分率として表わしても、六九・七、五六・六、四〇・八、三九・二%と、かなり高い共通比を示している。文単位の検討を試みられた吉岡氏は、「陽・国二本(正確に言えば陽・国二本の祖本)と河内本との關係はきわめて稀薄だといってよいであろう」(岩波「文学」59年1月号38頁)「大きな異文が、巻全体にわたって、枚挙にいとまがないといってよいほど散在するから、この両本と河内本とはまったく系統を異にする本文であり、両者の接触はほ

とんど考えがたいといわざるをえない。」(39頁)と指摘されているが、いかがなものであろうか。この点については、更に検討を加うべき問題があるように思われる。また、

河内本桐壺巻は麥生本の祖本とほぼ同一の本文を底本として、適宜諸本を参照しながら修訂を加えていった結果成立したと考えられる。(「河内本『桐壺』巻の校訂過程(下)」 岩波「文学」昭59年2月号 45頁)

というご指摘も、麥生本が「河内本成立以前の古伝本」であるとすれば従うべきもののように思われる。しかし、池田亀鑑博士も、「註釈的意図によって取扱はれた本文である場合」の例として、

麥生本及びその系統と思はれる阿里莫神社旧蔵本の如き、あるひはこの傾向をもつかも知れないが、なほ研究を要する。かかる本文の性格についての断定的な発言は慎重でなければならぬ。これも今後に残された重要な課題の一つであらう。現に鎌倉時代の写本と思はれる伝本の本文と麥生本の本文とが一致する如き事実があり、俄かに中世の作為とみなしがたく、また麥生本の関係者が親行のやうな大規模な校訂事業をなしたとも考へられなからである。(「源氏物語大成」巻七 研究資料篇 174頁)

と述べられている。この指摘は示唆にとみ、きわめて重要であるが、後にふれる。

河内本の青表紙本に対する異文が、別本諸本の複数の諸本と共通する場合、いかなる諸本と近親性を示しているか、近親度の高い方から「集計(Ⅰ)」によって拾い出していくと、次のようになる。上段は異文数、下段は共通異文第

二・三類の総数に対する百分率である。

麥・御・	48	12.8
麥・陽・	37	9.8
麥・陽・国・	36	9.6
麥・陽・国・御・	33	8.8
麥・陽・御・	31	8.2
麥・国・	21	5.6

麥・国・御・	20	5.3
陽・国・	12	3.2
陽・国・御・	10	2.6
陽・御・	5	1.3
国・御・	1	0.2

第三類のほぼ共通する異文について、同じような方法で示すと次のようになる。

麥・陽・	5	1.3
麥・陽・国・御・	3	0.8
麥・陽・御・	1	0.2
陽・国・	1	0.2

この二つの表にあらわれた近親度の順位は、本質的に矛盾する部分は存在しない。第三類のほぼ共通する異文例を除いた共通異文のうち、「麥・陽」、「麥・国」、「麥・陽・国」という形、つまり河内本・麥生本対国冬本、陽明文庫本という関係で表われる異文数は九四例、複数の共通異文総数二百五十四に対する百分率は三七%、陽明文庫本、国冬本がなんらかの形で関与しているものを含めると、七〇・一%となり、河内本と陽明文庫本、国冬本との関係を「きわめて稀薄」「まったく系統を異にする」とされる吉岡氏のご指摘に、きわめて不利な反証を与えるものといわなければならない。この事実と、陽明文庫本、国冬本に多くの独自異文を存する事実とは、別の視点に立つて考えられる必要があるように思われる。

次に別本諸本が青表紙本に対して異文をもつもののうち、一本のみの独自異文となっているものを集計した結果が、「(イ)第四類」である。別本の一本のみが独自異文を形成している異文数は一千六十四例で、諸本ごとの集計は次のごとくである。上段が異文数、下段がそれと異文総数との百分率である。

国・	410 38.3	陽・	368 34.4	御・	161 15.0	麥・	130 12.1
----	-------------	----	-------------	----	-------------	----	-------------

青表紙本との異文が最も少ないのは麥生本、最も多いのは国冬本であるが、注意すべきことは、四本の間にはかなり明確な断層を指摘することができるという点である。つまり独自異文率30%台を示す国冬本、陽明文庫本と10%台の低い比率を示す御物本、麥生本との存在である。そこにはやはり明確な断層、一線を画することが必要である。

ところが、集計「(二)第五・六類」は、別本諸本が複数の諸本と共通異文を形成するものについてまとめたものである。第五類は、別本諸本の間で共通する異文、第六類は、別本諸本の間ではば共通する異文である。第五・六類の異文総数は二百三十八例で、第四類の別本諸本一本のみが有する独自異文の総数一千六十五例との百分率は二・三％である。更に、共通異文を形成する場合、いかなる諸本と共通異文をつくっているか、集計「(一)」及び「(II)」から、その近親度の高い方から拾っていくと次のようになる。上段は共通異文数、下段は第五・六類の共通異文総数との百分率である。

第六類は、「陽・国・御」三例、一・二％、その他は「陽・麥」・「陽」・「国・御」・「国・陽」の形でそれぞれ一例、〇・四％となっている。

第五・六類を抽象的に単純化して、諸本ごとに還元し、その異文数と共通異文総数との百分率を示すと次のようである。

国・陽・	167	70.1
陽・御・	10	4.2
陽・麥・	10	4.2
国・御・	9	3.7
陽・麥・	9	3.7
御・麥・	9	3.7
陽・国・麥・	7	2.9
陽・国・御・	4	1.6
陽・国・御・麥・	3	1.2
国・御・麥・	2	0.8
御・陽・麥・	1	0.4

国・	208	87.4	陽・	206	86.6	麥・	43	18.1	御・	42	17.6
----	-----	------	----	-----	------	----	----	------	----	----	------

共通異文を形成する場合、国冬本、陽明文庫本の二本が、共通異文を形成するもの、八七・四％、八六・六％に達し、しかも、「国・陽」の形であらわれるものが七〇・一％にも達し、国冬本、陽明文庫本との関係なく共通異文を形成するものは「御・麥」の九例、三・七％に過ぎない。その他のものは、すべて国冬本、陽明文庫本両本がなんらかの形で関与している。この事実、系統論的にきわめて重要であり、かつ示唆的であると考えられる。

資料「0」の集計を通して、別本文の系統論的性格として次のような点を指摘した。

第一、河内本の異文は御物本、麥生本に最も近親性を示し、陽明文庫本にも近く、国冬本にも無関係ではない。

第二、国冬本、陽明文庫本一本だけに存する独自異文は非常に多く、御物本、麥生本のはば三倍に達する。

第三、国冬本、陽明文庫本に共通する異文は、麥生本、御物本のはば三倍に達する。

第四、麥生本と御物本に共通する異文は少なく、両本は陽明文庫本、国冬本を介して共通異文を形成する。

この系統論的性格は、資料「0」の集計、分析のみを通して、読みとったものであるが、資料ごとの検討を通して、この性格に離反、相反する性格があらわれている事実も既に指摘してきたごとくである。この系統論的性格を全資料の総合、分析を通して修正、補正を加えていくことのなかに、別本系統論樹立の作業とその可能性がありはしないかと考えられる。これらの本文的性格を、一つの先入観として、それにとらわれることなく、資料を帰納的、客観的に分析、考察していく必要がある。

系統論的性格第一の前半は、吉岡氏の文単位の検討に従えば容認されるが、異文の集成、客観的、統計的な処理を、共通異文という視点に立つて精確に行うと、「河内本の異文は麥生本に最も近親性を示し、陽明文庫本、御物本にも近く、国冬本にも無関係ではない」と修正すべきもののようである。「文単位」という方法をもって、陽明文庫本に「大きな異同が、巻全体にわたって、枚挙にいとまがないといつてよいほど散在する」という事実をもって、陽明文庫本や国冬本と河内本との関係を「きわめて稀薄」「まったく系統を異にする」と判定することは、この巻の調査、統計、分析に予想外の時間を費してきた作業過程のなかからも、集計結果からも、くり返し述べてきたように言い得ることではないのである。それが、どのような形であるかは後述するが、二百四十三の共通異文をもち、六五・〇％という共通異文百分率を有する陽明文庫本と、百六十九の共通異文をもち、四四・九％という共通異文百分率を有す

る国冬本を、吉岡氏のごとく断定されることは、氏の視点が、諸本の本文そのものという視座に立たれるという違いはあるにしても、本文の系統論的研究という文献学的枠組みを、かなり逸脱した立論といわなければならないように思われる。

系統論的性格第二は、「ほぼ三倍」を、「ほぼ二、三倍」と修正すべきであり、第三は、「諸本に単純化して還元するとほぼ五倍に達する」と補正し得る。第四はその内容について、いまだし検討されなければならない。

資料の箇々の分析過程で明らかにしてきたことではあるが、国冬本、御物本には、別本、河内本、青表紙本に亘つての混成、混態の現象を指摘することができた。例示した主な異文をあげて整理する。（「資料」及び第2節参照）

(イ) 御物本が青表紙本、河内本と混態を示している例。（「資料 4」）^⑭よし勅使来て・^⑮物思ひ知り給ふは

(ロ) 御物本、国冬本が青表紙本、河内本と混態を示している例。（「資料 7」）^⑯堪へがたき片端をだに・^⑰夜も

(ハ) 国冬本が御物本、陽明文庫本と混成を示している例。（「資料 5」）^⑱野分だちて・^⑲野分にいとど

(ニ) 国冬本が御物本、河内本と混成、混態を示している例。（「資料 10」）^⑳のいろあひも・^㉑けふらに・^㉒らうたげなりし

(ホ) 国冬本が陽明文庫本、河内本、青表紙本と混成、混態を示している例。（「資料 14」）^㉓と・^㉔ねむころに・

^㉕聞えさせ・^㉖給ひけり

(ヘ) 国冬本が御物本、陽明文庫本、青表紙本と混成、混態を示している例。（「資料 18」）^㉗はなやかなるに・^㉘

御方々の人々

(ト) 国冬本が青表紙本に近く、別本と混成、陽明文庫本が河内本、青表紙本に最も近く、御物本が青表紙本と河内本に混態を示している例。（「資料 15」）^㉙え恥ちあへ

以上の結果からすれば、国冬本、御物本などに混成、混態の現象が見られることは動かし難い事実であり、特に国冬本には独自異文も多く、四百十例、異文率も三八・三％に達すること、解釈的本文の存在することを考慮して従来の文献学的方法によるとすれば、かなり後代の手が加わった不純、不整な本文であると推定することが順当のようと思われる。しかし、源氏物語絵詞、源氏釈抄出本文、古系図裏書の本文などの校合を通して、院政時代から鎌倉時代にかけての本文の性格がある程度追求してきた立場からすれば、源氏物語の本文研究は一帖単位でなされるべきであるが、そのあるものは数帖単位の一つの物語群というような形で本文の特性を伝えているものもあるし、系統論的に循環論の矛盾に逢着せざるを得ないという陥穽におちいりがちでもあった。しかし、「伝津守国冬筆本源氏物語の周辺」（源氏物語とその周辺）伊那毎日新聞社）で、桐壺の巻に「草たくなり野あかきに所くあれたる心地して月のかけはかりそやえむくらにもさはらず」とある「源氏釈」抄出本文を対校し、

これによれば、桐壺巻では源氏釈の抄出本文は別本系統の陽明家本、国冬本、御物本などに最も近親性を示し、殊に陽明家本と国冬本に最も近いことは、「ところく」「侍る」などの異文によつて明らかである。これらの事実は、源氏釈の原形をなす本文と絵詞の本文とが別本系統の陽明家本、国冬本など同一系統内に属する本文によつて示している。（源氏物語とその周辺）24頁）

と述べたことがある。中村義雄氏（『絵巻物詞書の研究』角川書店）の「源氏物語絵巻詞書についての基礎的考察」補記から引用させていただく。

詞書の本文系統については、別に岩下光雄氏が詳細に調査検討されている。即ち「源氏物語絵詞の本文資料的価値」（昭34・1 自家版 後に『源氏物語論』昭42・10 佐紀社に収録 更に『源氏物語とその周辺』昭54・12 伊那毎日新聞社に収録）において、絵詞本文が別本系諸本、中でも陽明家本、国冬本、保坂本、西行筆本、横山本、御物

本などと近親性を示し、密接な系統的関係を有することを明らかにされ、国冬本については「玉上琢弥氏は、敬語の用法について論じられ、『特に従うべき価値ある本文でもない』と国冬本の用例を退けられてゐるが、にはかに従へない」といい、「国冬本が、絵詞の本文系統と深い関係を有することは明らかである」とされている。

岩下氏の一連の調査結果は、筆者のそれと殆ど一致しており、計らずも互に証明し合う格好となっている。氏は更に「伝津守国冬筆本源氏物語の周辺」（昭34・12 自家版後に上掲書に収録）において、絵詞の本文が従一位麗子本と近い関係にあるのではないか、また花園左大臣源有仁本もこの系統に属するものではなかったかとする筆者の推測（本書第二章及び同章註5の稲賀敬二氏論文参照）にも触れ、「源氏物語絵巻」の本文資料的価値は極めて重要なことを指摘、「従来の源氏物語系統論は、その根底から検討を加えられる必要性に迫られる」と述べておられる。（36頁）

少し長い引用になったが、中村氏からご指摘いただいた一連の研究は、昭和三十年代の発表で既に二十余年の歳月が経過し、その間、多くの方々から直接に、間接に何かとご教示、ご批判をいただくことが多かった。だが、大筋において現在でもこの考えを修正する必要はないと考えている。

伊井春樹氏（『源氏物語注釈史の研究』 桜楓社）は、「源氏釈」で用いられた本文が院政期の別本を使用していること、宮内庁書陵部蔵、貞成親王筆「源氏物語注釈」に抄出された古注逸文が、「源氏釈」と「奥入」の空白期を埋める本文資料であることを指摘されている。（同書98頁）また、阿部秋生氏（陽明叢書国書篇『源氏物語 一』 思文閣出版）は、

陽明文庫本の本文は、青表紙本・河内本の本文をどのようにとりあわせても出て来ないものである。両本の混淆から生じた別本ではない。逆に部分的には、河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみているのではないかと思われるところがあつた。とすると、陽明文庫本の本文は、河内本成立以後の本文ではないよ

うに思われる。(119頁)

と指摘されている。阿部氏の部分的な調査にもとづく推測が本文の実態を捉えたものでないことは「源氏物語 夕顔巻疏注」(本誌創刊号)で指摘したところであるが、箇々の問題点については論証には及ばなかった。「未完」としたゆえんでもあるが、吉岡氏、阿部氏が指摘されるように本文を「とりあわせる」という現存諸本の操作からは、陽明文庫本や国冬本の本文は絶対に出て来ない。このことは、陽明文庫本や国冬本を、麥生本などとは別系統の本文と考えるべきことを示しているのであろうか、それとも阿部氏の指摘されるように、「逆に部分的には、河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないか」と考えるべきであらうか。問題はなかなか単純には割り切れない錯綜した事情をかかこんでいるように思われるが、その点への決着が実はかなり重要な分岐点となるように考えている。

秋山虔・池田利夫氏(『尾州家河内本 源氏物語 第五巻』武蔵野書院)によつて尾州家河内本の「原本をできる限り忠実に翻刻」した本文と、河内本成立の過程についてかなり明確な事情を知ることができるようになった。東山御文庫本や鳳来寺本の奥書によれば、父光行の校定作業を継承し、親行は嘉禎二年(一二三六)から建長七年(一二五五)に至る二十年間の歳月を費して校訂作業を完成している。池田亀鑑博士(『大成』七 研究資料篇)の「第二次河内本の成立」期で、河内本の校訂作業はほとんど親行の手によつて、この期に成立したものと推定されている。光行が、藤原俊成の教示を得て校訂作業に着手した「第一次」を含めると半世紀に亘ることになるが、秋山・池田氏によれば、平瀬本に奥書を残す十帖の奥書群のうち、「第一次」の期間内にはみ出すのは横笛一帖のみで、やはり基本的には、池田博士の指摘に従うべきものように思われる。有力な証本八本を含む二十一本の校合を通して営まれた河内本の校訂事業は、「代表的古写本を集め、これを比較し用捨して、やうやく不審を散ずることができた。」こと、「古典は

安易な解釈を許さぬものであるが、文意を通じ易からしめるために句点を切り、あるひは仮名を読み易からしめるために文字を補ひ、多年の宿題の故に数度の校合を遂げたこと。」「その後重ねて校合を加へたこと。」を、鳳来寺本、東山御文庫本などの親行の奥書によつて知ることができる。こうした河内本の校訂態度は、従来、定家の青表紙本校訂の厳正な客観的、学問的立場と対立するものとして相対的にとらえようとするのが定説であつた（池田亀鑑博士「源氏物語大成」巻七 研究資料篇 135頁2行、10行参照）。筆者は既にかなり以前から、問題を指摘してきたのであるが、秋山・池田氏、更に吉岡氏による河内本校訂事業の方針に対する理解は、そうした従来の定説の批判の上に立たれるものであるところに意味があり、従うべきものと考えている。秋山・池田氏は、「親行が往代之風を慕い、すなわち近代の人の勝手な読解に流されずに、古本の優美な詞遣いを重視して校訂に従つたのは、以上の諸資料によつても推定することができる。ただ、恣意による本文の改竄がなされたとは思ひがたいが、異文が対立すれば、最終的にはその得失を判断していずれかに定めなければならない。」（233頁）とされ、

了悟から見て青表紙本と河内本とは対極に位置しているが、定家はどう「枝葉を抜」いたのであろう。定家が貫之自筆の土佐日記を写すに際して、適宜本文を改めたのは知られるところで、それと同じ方法で源氏物語証本を定めたのであれば、表現が洗い直されて、たとえ文学的価値が増したとしても、原作の心からは遠くならざるをえない。しかしながらこれも、奥入に「未勘」の文字を多く残す定家であれば、そうむやみに本文を改定するとも考えにくいし、家の女たちに写させて証本を作つたという記録に従うと、むしろ定家は、これと認めた一本を選んで、ただ写させただけであるようにも思われる。要するに両系統本ともに問題が残るのである。（235頁）

と指摘されている。了悟の「光源氏物語本事」と土佐日記の校訂態度をからませていくと「奥入」の識語は、とうてい額面通りにうけとることは出来ない。筆者は、「伝津守国冬筆本源氏物語の周辺」で、かつて次のように述べたこ

とがある。少し長文であるが引用する。

青表紙本の校訂者定家は、世尊寺伊行が源氏釈をあらわし、伊勢物語の研究にたずさわったことに批判的であったこと、源氏釈の本文の系統もその根本は別本系統であったこと、これらの事実は、平安時代に於ける源氏物語の本文の流伝が、別本系統の諸本を中心としてなされていたことを示すものである。そして、絵巻の中心をなす柏木巻から御法巻に至る一群が、国冬本と緊密な親近関係にあり、しかも麗子本と同一系統に属する事実は、定家本伊勢物語の非難めいた識語とともに注意されなければならない。定家の批判には、伊行の主知的態度への非難とだけでは考えられないものがあるようである。伊勢物語の研究において、伊行の主知的態度を奇怪狼籍なるものとして非難した定家は、源氏物語の研究に至つてその態度を改めざるを得なかった。定家自筆本奥入の識語によれば、源氏物語の古写本や古註を博搜、集成する意志を持ちながら、容易に完成し得なかったこと、伊行をはじめ、先業の業績を包容せざるを得なかったことが明らかであるが、こうした定家の理知的態度は、池田博士が高く評価される如く、その謙虚な真摯な心情に支えられた反主知的態度による本文への対決であり、伝来のままを尊重する古典愛護の考証的態度のみとはにわかに即断出来ないものがある。古写本、古註を博搜、集成しようとした定家の努力にもかかわらず、報いられるところは少なかった。源氏物語の研究に至つてその態度を改めざるを得なかった事情は、その辺に存在しているのではないか。（『源氏物語とその周辺』26頁）

そして、「こうした考証的、理知的態度への矛盾をあえておかざるを得なかったこと、伊行本や源氏釈への批判と共にまたそれへの傾斜と同化に向わざるを得なかったこと、これらの事情は、定家自筆本奥入の識語によつてその原形となった定家本が、校訂にかかわるものであることを示している事実と共に、青表紙本の系統論的純粋性を主張される池田博士の研究にきわめて不利な反証を与えるものといわざるを得ない」（28頁）と指摘したことがある。二十

五年以前の発表論文（『源氏物語とその周辺』「所収論文解題」参照）であるが、その論旨の骨格は、ようやく現代の源氏学の一流を成しつつあるように思われる。

ともかく、河内本の校訂事業は、更に聖寛、行阿ら、子子孫孫に継承されていくが、このように、苦心に苦心を重ねての河内本の校訂が、吉岡曠氏の指摘されるように、麥生本の祖本を底本とした片々たる校訂にとどまると考えてよいものであろうか。親行の校訂は第二次の時期に限っても二十年に亘る苦心の校訂事業であり、かなり大規模なものであったと推定される。それが、その程度の片々たるものであったと解することは不自然であり、やはり無理があるように思われる。河内本の校訂事業は、おそらく国冬本、陽明文庫本、青表紙本の原本または転写本、その他の本文など有力な証本八本を含む二十一本に亘る諸本の比較を通してなされたものであろうが、それは確かに、文意の通ずる、解釈本としての一面を持つ校訂本文の確立という面を持っていた。だがそれは、「本文を紊りに改変」ということではなかった。秋山・池田氏が指摘されるように、

河内本は本文の校訂のみではなく、一種の注釈とも称すべき「句を切り声をさす」ことが、光行時代から重んじられてきた。句読点を施すのは読みを示すことであり、声点や濁点を加え、更に難解な和語に漢字を宛てたり、主語などを示す簡略な注を施しさえすれば、不審は次第に晴れることにもなる。不審を散ずるための校訂とは、単なる本文の改訂のみを指すのではなく、こうした解読作業全体を意味するのであろう。現に尾州家本を始めとする河内本諸本の殆んどに朱による句読点、声点が見られ、一方、青表紙本にも多いが、振漢字や傍注も目立っている。（23頁）

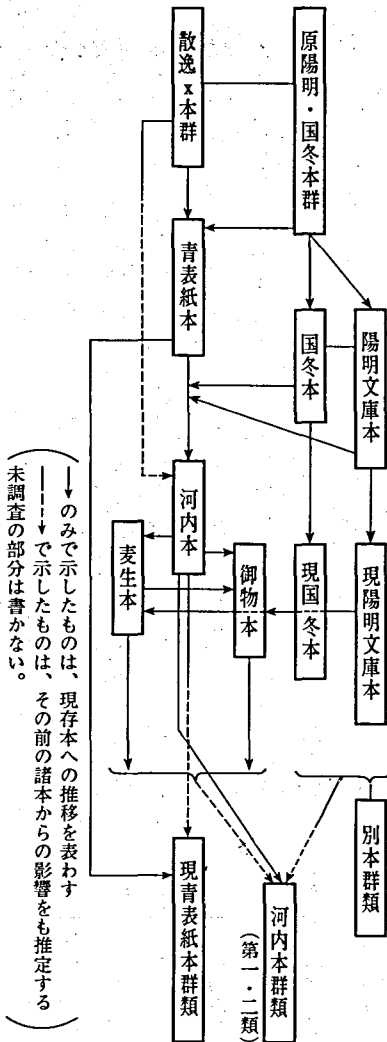
というもので、「恣意による本文の改竄がなされたとは思いたい」のである。それは、藤原定家の青表紙本校訂の態度とは「対照的」であり、「本文を紊りに改変しない」（『日本文学全史 中古』市古貞次・秋山虔 学燈社33頁）ところ

に、定家と親行の本文校訂の著しい違いを見ようとする従来の定説に対する批判であり、注釈的本文の発生という点に関する従来の見方は、やはり改められていく必要がある。

河内本が伝来の過程で、本文に手が加えられていったように、国冬本や陽明文庫本の本文にも同じような経路を想定しなければならぬ。だが、河内本の校訂作業を密度の高い大規模なものと推定し、現存諸本を前提として考えていく限り、阿部氏が指摘されていたように、「河内本は、この陽明文庫本、あるいはそれに近似した本文をみていたのではないかと思われるところがあつた。」（『源氏物語—陽明叢書』119頁）という考え方に従わざるを得ない。陽明文庫本や国冬本の本文は現存諸本をどう「とりあわせ」操作してもつくり出すことはできないが、河内本、麥生本は、青表紙本や陽明文庫本、国冬本などを「とりあわせ」操作すれば、ほぼつくり出していくことが可能でもある。そういう意味からすれば、国冬本や陽明文庫本の側に、河内本、麥生本の本文の原拠を求めていくことの方が自然であり、妥当性があるように思われる。麥生本の祖本を底本とする校訂に過ぎなかったとすれば、河内本成立の過程は、もっと軽い意味をもって表現されていたと考えなければならないはずである。

河内本との共通異文が、最も近い百分率を示す「資料 10」でも五三・八%であり、最も高い「資料 4」では九四・四%に達する。共通異文率八〇%を超えるものが、十九資料中、十一資料にも達するということは異常以外のなものでもない。池田博士は、麥生本を「註釈的意図によって取扱はれた本文である場合」とされ、「俄かに中世の作為とみなしがたく、また麥生本の関係者が親行のやうな大規模な校訂事業をなしたとも考へられない」と指摘されている。吉岡氏は、麥生本を「河内本成立以前の古伝本」とされ、異文の検討からその可能性を実証されたのであるが、相対的な解釈、想定、憶測をも挿しはさむ余地があり、にわかに従い難いことのように思われる。むしろ河内学派末流の本文と考えた方が、巻全体として共通異文率七九・九%という高い比率で河内本との共通異文を共存させて

いるという実体からは自然のように思われる。麥生本は、やはり河内本成立以後の、河内学派一流の徒によって享受されてきた本文であったと考えるべきではなからうか。更にまた御物本は、河内本、麥生本を根幹として、国冬本、陽明家本との接触を通してつくり出されていったものだと考えた方が、その混成、混態の実体を説明し得るように思う。御物本と麥生本とが、河内本との共通異文を四十八例、共通異文率十二・八%を有することは、麥生本一本の共通異文五十二例、共通異文率十三・九%に次ぐものであり、そうした推定を裏づけている。「資料 0-18 集計」「(I)」及び「(II)」から想定し得る本文系統論を一つの憶測を加えながら、試案として図示する。この試案は、桐壺巻における諸本の本文系統論として、「資料」をもとに、過去に発表してきた論文の要旨をもふまえて、きわめて大胆な憶測をも加えて系統化を試みたものである。



だが、更に注意しなければならないことがある。夕顔の巻について、河内本と陽明文庫本との校合を通して、本文

の異同が、源氏物語の享受の相と深くかわることを指摘した（「源氏物語 夕顔の巻疏注」本誌創刊号）。そして、桐壺・帚木・空蟬の巻については、そうした享受とのかかわりを、河内本と陽明文庫本との校合の過程では指摘できないことを述べた。しかし、別本系統の国冬本、御物本、麥生本を注意深く校合していくと、やはり夕顔の巻で見ることの出来た享受とのかかわりを同じように指摘することが出来る。吉岡氏の驥尾にふし、既に百六十九枚にまとめていた兩本校合の資料を反古にして、新たに校合を加えた結果を分析していくと、やはりそのような考えに到達せざるを得なかった。だが、資料の箇々の部分によって、校合に用いる諸本とのかかわりにより、こうした事実があらわれてくることの意味は、更に立ち入って検討を加える必要があるように思う。ともかく、別本系統の諸本を校合し、手沢本を作っていく過程の中で、校異の著しい部分と、比較的少ない部分とが、群を成してあらわれてくることの意味は、いま少し慎重に検討を加えられてもいいことのように考える。

桐壺の巻で、異文が顕著に多くあらわれ、たてこんでくるのは、「資料 12」の後半部からで、「今は内裏にのみさぶらび給ふ。」という御読書始の段落からで、その前の段落とは明確に一線を画することが出来る。そして、この傾向は桐壺の巻末まで続く。但し、「資料 17」は「いとなき初元結に長き世を」、「結びつる心も深きもとゆひに」という帝と左大臣の贈答歌を含む部分で、この歌を中心とする前後の部分は、比較的異文が少なくなっている。「資料 12」を境にして「麥生本」、「陽明文庫本」、「麥生本・陽明文庫本」という形で河内本との共通異文が多くあらわれてくる。そして、「御物本・麥生本・陽明文庫本・国冬本」「御物本」「御物本・麥生本」もそれに引かれるような形であらわれる。つまりこの部分の異文の錯綜は、麥生本、陽明文庫本、御物本との関係のなかで顕著にあらわれてくるという事実である。そればかりか、「(四)第二・三類」の河内本との共通異文のあらわれ方を注意深く読んでいくと、資料Noの横の関係か、分類の縦の関係で連続して群を成してあらわれているという厳然たる事実が存在する。共通異

文は、そのほとんどが、横か縦かに連続し、孤立してはあらわれていない。この事實は、いったい何を意味しているのだろうか。それは、本文校訂の実体を如実に示すものであり、物語享受の実態を示すものの以外の何ものでもないように思われる。本文の校訂に当って、諸本のすべてに亘って一語一語比較検討するということはきわめて稀なことであり、かなりの部分を同一諸本を中心に校合を加えていく、そうした校訂作業が一般的であったことを示している。また、「資料 17」で指摘したように、贈答歌の前後で異文の少なくなっていく現象は、「資料 3」の「限りとて別る道の悲しきに」の歌の後の部分に、長い異文が錯綜して来るのと逆の現象であるが、それは物語享受に深くかわる、人物や情趣の世界をより深く、豊かに、あるいはより個性的に読み味わい享受していこうとする意識にも支えられていた。源氏物語は、そうした享受の相にたえられる作品として作られ、それによって変相を遂げてきた作品であった。

4

「青表紙本と河内本とのもつとも顕著な異同箇所として古来よく引き合いに出される一節」(『源氏物語と和歌 研究と資料』 紫式部学会編 武蔵野書院 吉岡曠 「桐壺卷異文考証」 33頁)「尋ねゆくまぼろしもがな」の歌に続く部分を対校し、従来の説に再検討を加えながら、本文系統論と物語享受との関係の一端を明らかにしていくことにする。底本は「大成」の池田本により、略称も「大成」のそれに従った。

イ かきたる長恨歌のやう貴ひかたちは・国・

イ かきたるやうくゐひは・陽・

糸に・かける・楊貴妃のかたち・はいみしき

糸しといへともふてかきりありければい

イ……………

イ風かよひ・御・

イにも 麥・

イ……………ナシ・御・

イ……………ナシ・河・国・

イ……………ナシ・肖・三・

とにほひすくなし大液芙蓉未央柳もけに

……………

イのいろあひも・国・

イけんかたち・麥・

イよそへ・麥・

イいろあひを・河・御・

イたりけんよそひ・河・御・国・

かよひたりし・かたちをからめいたるよそ

……………

イけふらにこそ・国・

イけふらにこそは・河

イうけふらにこそ（補入）横

ひはうるわしうこそありけめなつかしう

.....ナシ・陽

イ.....ナシ・御

イらうたかりしを・麥・

イおもほしいつるに・陽・

イおもほしいつるには・麥・

イ.....ナシ・御・

イはをありさまおはなの風になひきたるよりも

イをありさまはおはなの風になひきたるよりも

イありさまはをみなへしの風になひきた

イありさまはをみなへしの風になひきた（河）

らうたけなりしをおほしいつるに花とりの

イねによそふ・国・

なよひなてしこのつゆにぬれたるよりもなつかしうらうたけなりしかたちけはひを・国・

なよひなてしこのつゆにぬれたるよりもなつかしかりしかたちけはひを・陽・

るよりもなよひなてしこの露にぬれたるよりもらうたくなつかしかりしかたちけはひの恋しさを・御・
るよりもなよひなてしこのつゆにぬれたるよりもらうたくなつかしかりしかたちけはひを・河・

イふ〈補入〉大・

いろにもねにもよそふへき方そなき

吉岡氏も「河内本「桐壺」巻の校訂過程（下）」（岩波書店「文学」昭59・2）で自ら引用されている「桐壺巻異文考証」の論述を二頁に亘る長文であるが、引用させていただく。

この一節に関しては、青表紙本文の解釈そのものに疑問があるので、まずそのことについてのべたい。問題は「けにかよひたりしかたちを」で、諸注ほぼ一致してこの「かたち」を楊貴妃の「かたち」と解釈している。長恨歌が楊貴妃の容姿にたとえている「大液芙蓉未央柳」を受けて「けにかよひたりしかたちを」とあるのだから、そうとりたくなるのも無理はないが、実をいうと、これを楊貴妃の「かたち」とするには二つの難点がある。その一つは、「かよひたりし」と、直接体験の回想を原則とする「き」が用いられていることである。帝は実物の楊貴妃に会ったわけではないから、これが楊貴妃の「かたち」であるならば、「かよひたりける」あるいは「かよひたりけむ」とありたい。なお、これは実物の楊貴妃ではなく、画像の楊貴妃についていっているのだという説があるが、画像の楊貴妃については、すぐ前で「いとにほひすくなし」と否定的感想がのべられているのだから、そうは受けとりにくい。もう一つの難点は、これを楊貴妃の「かたち」とすると、ここの構文は〈大液の芙蓉・未央の柳にも、なるほど似通っていた楊貴妃の容貌であるが〉という形で下文につながっていくと考えるは

かはなく、「かたちを」の「を」は逆接の接続助詞ということになるが、接続助詞の「を」は用言を受けるのが普通で、原則として体言は受けない。以上の二点を考慮して、この「かたち」を更衣の「かたち」ととり、「かたちを」の「を」は、「からめいたるよそひはうるはしうこそありけめ」という挿入句を間にはさんで、「なつかしうらうたけなりしを」の「を」と同格の格助詞であり、いずれも「おほしいつる」〈原文には「いづる」とあるが、『文学』の引用文により改めた——筆者注〉が受けている、というのが私の解釈である。念のため、必要なかぎりで多少の言葉を補って通釈すると、次の通りである。〈絵にかいた楊貴妃の顔立ちは、すぐれた絵師といつても、筆力には限度というものがあつたので、たいそう生色にとぼしい。実物の楊貴妃の美しい容姿を、白楽天は大液池の芙蓉・未央宮の柳にたとえたが、なるほど芙蓉にも柳にも似通つていたあの更衣の顔立ちを（第一段）、いや、楊貴妃の唐風のよそおいは端正でこそあつたろうが、したしみやすくかわいらしいことでははるかにまさつていた更衣の様子を（第二段）、思い出しなされると、それはもう花鳥の色にも音にもたえようすべがない（第三段）。〉この一節は、「おほしいつるに」を除くと、すべて帝の視点に立つて、帝自身の思念の流れをのべたものだが、仮に三段に分けた第一段では、想像裡の楊貴妃の容姿に更容の容姿がオーバーラップし、両者を対等に比較しているのに、第二段ではみずからその比較に反撥し、第三段では、芙蓉にも、柳にも、花鳥の色にも音にもたえようすべがないこと、第一段の思念を全否定して終っている。一段ごとに更衣への思慕が強さをまし、しまいにはたえがたいものになる、そういう心情のたかぶりを、心情のたかぶりのままに、見事に描き出した行文だといつてよい。

青表紙本の本文を以上のように解釈してくると、河内本の意図はすでに明白だといつてよいだろう。「かたち」の箇所が「かたちいろいろあひ」になると、「かたち」と「いろいろあひ」と「からめいたりけんよそひ」の三者が並列

して、いずれも「うるわしうけふらにこそはありけめ」で受けられることになり、すべて楊貴妃についての叙述になる。後世の注釈書と同じように、この「かたち」を楊貴妃の「かたち」と思いこんだ、河内本あるいはその他の諸本の校訂者が、紛れようのない形に改めたのである。「をみなへしの」以下の長文の補入もそれと連動する本文改訂で、「かたち」が楊貴妃の「かたち」になったのにもなつて、この一節の大部分が、帝の回想の当の対象である更衣をさしおいて、楊貴妃についての言及になつてしまつた失当をつぐなうための措置であらう。この部分がのちの補入であることは「なつかしうらうたけなりしありさまは……らうたくなつかしかりしかたちを」というぶざまなくり返しが何よりもよく物語っている。（『源氏物語と和歌 研究と資料Ⅱ』 古代文学論叢第八輯

武蔵野書院 33頁―35頁）

吉岡氏の論は明快であり、理路整然とした立論で、説得力をもっているように見える。しかし、仔細に検討を加えていくと、なお従い難い多くの問題をもっているようにも思われる。吉岡氏が指摘されるように、青表紙本の「けにかよひたりしかたち」を楊貴妃の「かたち」と解してきた従来の解釈は誤りである。「き」は、

上代古くから鎌倉、室町時代まで広く用いられた。「けり」と並んで過去・回想・記憶の意を表わす助動詞としてであるが、「けり」が存在・詠嘆的であり、他説、風聞などによつて間接的経験を述べるのに対し、「き」は行為的・直写的であり、端的に自己の経験の過去を語る意味が基本である。また「けり」は説明的、客観的、叙事であるのに対し、「き」は記述的で自己中心の主観化があるとも見られる。（『日本文法大辞典』松村明 明治書院

151頁）

と考えるべきで、この使い分けは物語の中で意識的に明確になされている。また、格助詞「を」と解された吉岡氏の解釈も妥当である。接続助詞「を」は、格助詞として用いられたもののうち、活用形の連体形に接続するものの中か

ら現われたものであるから、体言に接続する「を」を接続助詞に解することは誤りである。だが、第三段は吉岡氏が指摘するように、「芙蓉にも、柳にも、花鳥の色にも音にもたとえようすべがないこと」を言い、「一段ごとに更衣への思慕が強さをまし、しまいにはたえがたいものになる、そういう心情のたかぶりを、心情のたかぶりのままに、見事に描き出した行文」と解すべきものであろうか。「花鳥の」「色」「音」と隔対的に表現される「も」は、並列の意味を表わす係助詞で、同類のものの中から一つをとりあげ、他を類推させていくような意味をかね表わすものであろうか。この語句は、物語の中で慣用的ともいえるような使われ方がなされているので、それらの用例を拾いながら検討を加えていくことにする。

(1) 唐土には、春の花の錦に如くものなしといひはンべめり。大和言の葉には、秋のあはれを取立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへ侍らね。せば垣根の内なりとも、その折々の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも堀り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづかたにか御心寄せ侍るべからむ」と聞え給ふに、(吉沢義則「源氏物語新釈」巻一 薄雲 261頁)

(2) 三月の二十日あまりの頃ほひ、春のお前の有様、常より殊につくして匂ふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、珍らしい見え聞ゆ。(同 巻三 胡蝶 19頁)

(3) 故権大納言、何の折々にも、亡きにつけていとど偲はるること多く、おほやけ私、物の折節の匂ひ失せたる心地こそすれ。花鳥の色にもねにも思ひわきまへ、いふかひある方の、いとうるさかりしものを」など宣ひいでて、

(同 巻四 鈴虫 202頁)

(4) げにいと見奉らまほしき御有様は、この世にたくひなくおはしますめれど、盛りならぬ心地ぞするや。こと笛

のしらべ、花鳥の色をもねをも、時に随ひてこそ人の耳にもとまるものなれ。春宮はいかが」など申し給へば、

(同 竹河 400頁)

(5)行きかふ時々随ひ、花鳥の色をもねをも、同じ心に起き臥し見つ、はかなき事をも、もと末を取りていひかはし、心細き世の憂さもつらさも、うち語らひあはせ聞えしにこそ慰むかたもありしか、(同 卷五 早蕨 185頁)

(6)打眺めて物し給ふ気色、心苦しげなるを、げにおはせましかば、おぼつかならずゆきかへり、かたみに花の色鳥の声を折につけつつ、すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世を、など思し出づるにつけては、ひたぶるに絶えこもり給へりすまひの心細さよりも、飽かず悲しう口惜しきことぞいとどまさりける。(同 早蕨 244頁)

『新釈本』索引によって調査し得た六例の用例について検討する。(1)は源氏の詞。『日本古典文学全集』(小学館)は、『唐土では、春の花の錦に及ぶものはないと言っておりまうです。この国の和歌では、秋の情趣を格別と考えていますが、それをどちらもその季節季節につけて見ますと、目移りがして、とても花の色を、鳥の声をと、その優劣を区別できるものではありません。』(2) 45頁と解する。『評釈』(玉上琢弥 角川書店)は、『いずれもそのときそのときの様子を見ますと、それぞれのときがよく見えまして、とても花の色、鳥のねを判断することができません。』(第四卷 224頁)とする。なんとなく読み過ごしてしまえば、それで済みそうな所であるが、この二つの注釈は、『花鳥の色をも音をも』が文脈の中で、どのような関係に立つのかという点には答えていない。『評釈』の「とても花の色、鳥のねを判断することができません。」という現代語訳に至っては従い難いものがある。万葉集の額田王の歌を引くまでもなく、用例(2)によってもこれは春の季節のもの。『日本古典文学大系』(岩波書店)は、『わきまへ侍らね。』の傍注に『春秋何れよきかを』とする。用例(1)全体の文脈をおさえると、この傍注はきわめて適切で動かしようがないようにも見える。その点をおさえた上で、『とても花の色を、鳥の声をと』という部分を削除して『全集』の現代

語訳を読むと文意が通る。だが、この部分を入れると通らなくなる。「その」が何を指すのか、その点が明確になっていないからだ。ところが、河内本は「いつれも捨てかたし」とこで言い切りになっている。これを考慮に入れた上で、「時々につけて」「その折々の心」の「時々」「折々」を通説のように「季節」というように同じ意味に解さずに、青表紙本の本文を考えていくと文意が通るようになる。河内本と同じ本文をもっているのは、別本系統の陽明文庫本・保坂本・伝二条為氏本であり、「いつれもすてかたし」となっているのは、麥生本・阿里莫本である。「とりたてておもへる」は、河内本系統の大島本、別本系統の伝二条為氏筆本には「とりたてておもへり」とある。「大系」本の本文はこれによる。河内本、別本か、青表紙本かという本文批判をなさずに、「文意」という点に視点を置いて青表紙本のこの部分についての解釈の私案を示す。「春秋いずれも、同じ季節の中でもその時、その時につけての景物を見るにつけても目移りがして、花の色、鳥の音という春の景物の優劣も区別申しあげられないのです。」これは秋好中宮に対する源氏の詞であり、紫上は春の季節の館に住むことになる点を考慮に入れる。漢詩文と和歌の世界が、春と秋の季節を対比的に理想として捉えていることを考え、同じ春の季節の風物でさえ、その優劣をことわりかねることを述べる。そこには、相手の心情をやさしく思いやる心、季節の景物をいとおしむ、物の情趣を解する見事な光源氏像が表現されている。「せばき垣根の内なりとも」を「全集」は「自邸を謙遜している」と注し、「評釈」も「狭いわたしの家ではございますが」と語釈する。中国、日本の文学が、それぞれ春と秋の季節を理想とすることを述べながら、あなたはどの季節を愛するのかという無理強いをしない、そういう配慮、思いやりの、したたかさ、奥ゆかしさを読みとるならば、「とも」に謙遜の情とともに、「中国、日本というような広い世界のことではなく、せまい自邸の植え込みであつても」という、仮定表現の裏側に、対比、含蓄的に述語用言との結びつきを強める意味を揺曳させていることも、読みとつていかなければならない。このように考えてくると、「色をも音をも」という「も」

が、「類例列挙の表現」であることは明確である。

(2)は、胡蝶の巻冒頭の文章。「全集」の現代語訳は、「三月の二十日過ぎのころ、春の御殿のお庭前の有様は、常にもましてことのほかに美しさのかぎりを尽くして咲き誇る花の色、鳥の声に、ほかの方々のところは「あちらではまだ盛りが過ぎないのだろうか」と不思議にすばらしく見えたり、聞こえたりする。」(3頁)とある。「評釈」は、「三月二十日過ぎのころ、春のお庭さきの様子は、いつもよりことに、すべていきいきとした花の色、鳥の声に、よその方々は(ここだけ)まだ春の盛りが過ぎないのかと、すばらしく見えもし聞こえもする。」(第五巻 21頁)とする。語順と構文を追って現代語訳していくと、確かにこういうことになるだろうが、はたしてこれが現代語訳といえるかどうか。妙に間延びしてしまっている。「大系」は、「ほかのさとは」は「めづらしう」にかかる(二頁 35頁)とし、「語釈」は、「珍らしう云々」を修飾する(巻三 19頁)とする。ところが、「花の色、鳥の声」というのは、他の文とどのような関係に立つのか。やはり隔対的に「花の色、鳥の声、へへ見え聞ゆ」という意識を潜在させた表現であり、「ほかの里にはへへ珍らしう見え聞ゆ」という構造をもつ。そこには文脈の一つのねじれが見られる。「類似列挙の表現」ではあるが、並列的意識、対偶意識にささえられた技巧的な表現であり、源氏物語の文体の深い趣は、実はそういう面にあるのだと思う。現代語訳を示す。「旧暦三月の二十日過ぎの頃、紫上の春の館のお庭には、常にもまして美しさの限りを尽して咲きほこる花が眺められ、うららかに声の限りを尽して鳴く鳥の声も聞こえてくる。ほかの館の方々は、「あちらではまだ春の盛りが過ぎないのかしら。」と、その様子を不思議に思ったり、聞いてりしている。」文脈のねじれを、そのまま現代語に言い換えようとした従来の解釈は、よく考えてみると、意味の通らない曖昧この上もない、妙な文章になっている。源氏物語の現代語訳には、実はこういう類のものが非常に多い。私案も、最初「それを見たり、聞いたたりしている」としたものを状況判断から改めた。いかがなものであろうか。

「与謝野源氏」「谷崎源氏」を引く。

三月の二十日過ぎ、六条院の春の御殿の庭は平生にもまして多くの花が咲き、多くさえずる小鳥がきて、春はここにばかり好意を見せていると思われるほどの自然の美に満たされていた。(河出書房 日本文学全集『源氏物語 上巻』 37頁)

三月の二十あまりの頃の春の御殿の有様は、例年よりもことに匂いを尽くして咲き出でた花のいろ、鳥のこえなど、余所に比べてここばかりはまだ盛りが過ぎないのかと、珍しく思われるのです。(『新々訳 源氏物語 第四』 中央公論社 175頁)

これらの現代語訳は、語順をおって逐語訳していく国文学専攻者の奇妙な現代語訳よりは、すっきりしていて文意が通っている。

(3)は、鈴虫の巻後半部で源氏の詞。「花の色につけ、鈴虫の音につけ深い趣味がよくわかって」(『全集』(4) 371頁)の意。(4)は「花の色、鳥の声も、時節に従ってこそはじめて人の耳にもこのるものです。」(『全集』(5) 71頁)の意。(5)は早蕨の巻の冒頭で「花の色をも鳥の鳴く音をも姉君と同じ心で」の意で、ともに「後撰」巻四、212、藤原雅正の歌「はな鳥の色をもねをもいたづらに物うかる身はすぐすのみなり」(『新編 国歌大観』角川書店)によるもの。(6)は早蕨の巻の巻末で、「姉君がご存命でいらつしやるのだつたら、お互いに気がねなく行き来して、花の色や鳥の声をその折々楽しみながら」(『全集』(5) 338頁)の意となる。こうした類型的な表現を検討していくと、「花鳥の」「色」「音」と隔対的に表現される「も」は、並列の意味を表わす係助詞で、同類のものの中から一つをとりあげ、他を類推させていくような意味をかね表わすものでないことが明確である。この部分は、

太液の芙蓉や未央の柳にもほんとうによく似ていた更衣の顔立ち——楊貴妃の唐風なよそおいは確かに端正な美

しさはあつただろうが——この更衣の、親しみやすく、かわいらしい様子であつたのを思い出しにならると、花の色や鳥の音にもたとえようすべがない。

と解すべきである。吉岡氏が指摘されるように、第一段から第三段への意識の流れは見られない。け近く、愛らしい更衣と、すました端正な美しさを持った楊貴妃が、見事に対偶的に絵画的世界のなかに形象されている。桐壺の巻は、長恨歌の詩句をちりばめ、長恨歌の世界を下に引き、その翻案の面白さともいうべきものを味わいながら、物語を読んでいくことのたのしさを教えているように見える。

だが、そうした対偶的な構成や表現が、源氏物語の美意識として貫かれていることの意味は、もっと別の立場からも考えられなければならないことに思われもする。本文批判が、その簡潔さ、合理性、含蓄ある詩的表現の正当性、妥当性という論点から、それが原本や原形に近いものであると短絡していくことは、配慮を欠くことのように思われる。本文の再建、本文系統論の樹立という志向とともに、享受の相を追求していくところにも、本文批判、本文研究の大切な部分が、また存在しているように考えている。従来の文献学的研究は、そういう点でも一方にやや片寄り過ぎていたのではないか、という自分自身に対する反省がないわけではない。注釈史を通して、そうした視点から検討を加えていくことにする。『紫明抄』から必要な部分を引用する。

三品の本桐壺巻をひらき見れば、系にかけるやうきひのかたちはいみじき系しといへともふてかきりありければいとにほひすくなしたいえきのふようひやうのやなきも、とかきて、ひやうの柳といふ一句を見せけちにせり、すなはち親行をつかひとして申やりける、楊貴妃をは芙蓉と柳にたとへ、更衣をはをみなへしとなでしこにたとふ、みな二句つゝにてよくきこえ侍を、御本に未央の柳をけたれたるは、いかなる子細の侍そや、と申たりしかは、我はいかてかざる自由のわざはし侍へき、侍従大納言行成卿一筆本に、この一句を見せけちにせり、紫式部

同時の人に侍れば、申あはするやうこそありつらめとて、これも墨をつけては侍れと、いふかしさにあまたゝひ見しほとに、若菜の巻にて心をえておもしろく見なして侍なり（『紫明抄 河海抄』 玉上琢弥編 角川書店 16頁）

「三品の本」の部分に「俊成卿」の傍注がある。だが、親行は俊成が若菜の巻のどの記述によつて「心をえておもしろく見なし」たのかを聞かずに帰り、光行にたしなめられ、「若菜巻をひらき見る事六十遍にをよひてその心を」得たという。それは、女三宮を「二月のなかの十日はかりのあとをやぎのわつかにしたりはしめたらん心ちして」と表現するのと重複するので、「はしめの未央の柳はようなき物」とする事だつた。そして、「父にかたるに、みやこの好士さま／＼おほかれと、この三品の和才すくれたる中に、この物語をあきらかにもあそふ人たくひなきかゆへに、逸興を見たてられたるなるへし、とて、この一句を見せけちにし侍しかは、愚本もおなしに見せけちにし侍なり」（同 16頁）とする。『紫明抄』は、俊成が「逸興を見たてられたるなるべし」と解しているが、「逸興」とは「格別に興味深いさま。また、一風変わった面白味のあるさま。」（小学館『国語大辞典』154頁）の意。それは行成卿筆本の本文を尊重する俊成卿の立場に重点が置かれ、源氏学の碩学に対する畏敬の念が随伴していると考えるべきである。同じ河内学派の『原中最秘鈔』には、「三品の和才勝れたる中に」の後に、

此物○（語）の奥義をさへきはめられ侍りけるありかたき事なりしかあるを京極中納言入道の家の本に未央柳と書れある事も侍るにや又俊成卿の女に尋申侍りかは此事は伝々（展敷）の書写のあやまりに書入るにやあやまりに对句めかしくにくいけしたる方侍にやと云々よりて愚本に不用之（『大成』巻七 研究資料篇 545頁 一部通行の漢字に改む）

とある。『河海抄』は、「俊成卿本に未央柳の一句を」の註記の後に「人の貞を柳にたとへたる事一部の内に両所あり無念なるに似たり然而芙蓉柳是又いつも除かたきによりて書なからみせけにしたる歟^{云々}」（『紫明抄 河海抄』角川

書店 202頁)とする。「弄花抄」には、「見花鳥未央柳青表紙本には有子細不能注也」(桜楓社 古注集成 14頁)とある。ところが、『花鳥余情』「なつかしうらうたけなりしありさまは女郎花の風になひきたるよりもなよひなてしこの露にぬれたるよりもうたく」の註記には、

此一段の詞為相卿の本にはかゝすこ(そ)の心を案するにきりつほの更衣のかたちけはひをおほしいつるに花とりの色にもねにもよそふへきかたなしといへるに又しかをもみなへしなてしこにたとへ侍れは前後の詞相違するによりて此詞をすへ(すへて)略し侍るにや河内か家の本によらは楊貴妃のからめいたるよそひは芙蓉柳にたとへ侍り更衣のなつかしくうたけなりしけはひは女郎花の風になひきなてしこの露にぬれたるによそへ侍りさりなからそれともいきてありし時の事也いま(今は)その人もなくなり侍れは御門の御心には花鳥の色にもねにもよそふへきかたなしと思給へりかくのことく心をやりてみ侍れは前後の相違もなきにや但源氏の本一様ならず人のこのむ所にしたかふへし(源氏物語古注集成「松永本 花鳥余情」 伊井春樹 桜楓社 15頁)とある。後半部の説明と、「但源氏の本一様ならず人のこのむ所にしたかふへし」というのは如何なものか。一條兼良の文芸的で熱狂的であつた源氏物語享受の一つの限界が示されているように思われる。

肖柏の「一葉抄」には、

青表紙の本にハをミなへしなてしこのたとへを略して花鳥の色にもねにもとあり詞つかひ重疊せすして聞きよきにや心ハ楊貴妃を芙蓉柳にたとへしハうるハしくこそありけめ今更衣の事をおもふにハ花にも鳥にもよそふへき方なしと也ふよう柳にたとへしハなをさりなるへき心也(桜楓社 古注集成「一葉抄」 井爪康之編 17頁)

とあり、室町末期を代表する同時代の古注『孟津抄』などにも同じ註記が見えている。しかし、『河海抄』には、「をみなへしの風になひきたるよりも」の注に、

京極北政所本（従一位麗子）にはおはなの風になひきたるとあり或本には此句なし（角川書店『紫明抄 河海抄』202頁）

と見えている。従一位麗子本が由緒ある貴重な伝来を有する本文であることは本稿でも既に指摘し、別稿でも論じたところであるが、「をばな」の語をもつ現存諸本は、陽明文庫本と国冬本とである。源氏物語絵詞、従一位麗子本というような、平安時代の物語本文の証跡を確実に伝えている本文の事実は尊重されなければならない。吉岡氏が指摘されるように、「河内本あるいはその他の諸本の校訂者が、紛れようのない形に改めた」、「をみなへしの」以下の長文の補入もそれと連動する本文改訂」とは考えられない。そこには、源氏物語享受史の長い集積が見られる。確かに「ぶざまなくり返し」には違いないが、そのようにして集積された本文を結集、合理化していくことが、河内本校訂作業の一つの側面であつた事実も考慮されなければならない。室町時代の注釈書ではあるが、牡丹花肖柏が「一葉抄」で「青表紙の本にハをミなへしなしてこのたとへを略して」と註記し、了悟が「光源氏物語本事」で「こと葉もよのつねよりも枝葉をぬきたる本」（尾州家河内本『源氏物語』第五卷武蔵野書院 234頁）という青表紙の本文的性格は、別の立場からも再検討を加えられる必要がある。

源氏物語のなかに用いられている「をばな」「をみなへし」「なでしこ」について、物語のなかでどのように用いられているか、『新釈』本の索引により調査する。

(1) 「をばな」宿木の巻に一例。

枯れくゝなる前栽のなかに、尾花の、物より殊に手をさし出でて招くがをかしう見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒、はかなげに打靡きたるなど、例のことなれど、夕風なほあはれなりかし。

穂に出でぬ物思ふらし篠薄招く袂の露しげくして（300頁）

この段は、『古今』秋上 在原棟梁の歌「秋の野の草のたもとか花すすきはにいでてまねく袖と見ゆらむ」を重ね、和歌固有の発想によって抒情と叙景とが融合したうつくしく、そしてかなしい、絵巻の世界をつくり出している。中君が隠喩的に表現され、歌は薫との関係を詰る匂宮の歌。

(2) 「をみなへし」「色」を除く十五例。

- ① 吹き乱る風の気色に女郎花しをれしぬべき心地こそすれ (野分 117頁)
- ② 下露に靡かましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし (野分 117頁)
- ③ 女郎花しをるる野辺を何処とて一夜許りの宿を借りけむ (夕霧 238頁)
- ④ 秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にも、をさく御心移し給はず (匂宮 358頁)
- ⑤ 女郎花咲ける大野を防ぎつつ心せばくやしめを結ふらむ (総角 122頁)
- ⑥ 霧深きあしたの原の女郎花心を寄せて見る人ぞ見る (総角 123頁)
- ⑦ 女郎花をば見過ぎてぞ出で給ひぬる。 (宿木 233頁)
- ⑧ 女郎花しをれぞまざる朝霧のいかにおきける名残なるらむ (宿木 251頁)
- ⑨ 女郎花乱るる野辺にまじるとも露のあだ名を我にかけめや (蜻蛉 223頁)
- ⑩ 花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする (蜻蛉 223頁)
- ⑪ 旅寝してなほ試みよ女郎花さかりの色に移り移らず (蜻蛉 223頁)
- ⑫ 女郎花、桔梗など咲きはじめたるに、 (手習 254頁)
- ⑬ 前近き女郎花を折りて、「何匂ふらむ」と口ずさみて (手習 258頁)
- ⑭ あだし野の風に靡くな女郎花われしめゆはむ道遠くとも (手習 262頁)

⑮ 移し植ゑて思ひ乱れぬ女郎花憂き世を背く草の庵に (手習 282頁)

①は玉鬘の歌で、自分自身を花にたとえる。②は玉鬘を口説く源氏の歌。③は夕霧との結婚を許す氣持を秘めた御息所の代作歌。落葉の宮をたとえる。④は句宮の心情を。⑤は句宮が薫を恨み、⑥はそれに答える薫の歌。ともに宇治の姫君達をたとえる。⑦は句宮の二条の邸に住む中君をたとえる。薫が中君をの意。⑧は六君をたとえる。句宮に對する落葉宮の代作歌。⑨は薫の歌。こんなに大勢の女の中の意。⑩中將の歌で、中將自身をたとえる。⑪弁の歌。美しい女達にの意。⑫は小野の山里の庭の様子。⑬庭前の女郎花。亡き妻を思い出させる女の意。⑭中將が小野の里に身を隠す浮舟に。浮舟をたとえる。⑮は妹の尼君の代作歌。浮舟を指す。調査し得た十五例について、十三例が女性をたとえた表現であり、二例が庭の花であるが、微妙に女性への連想を深めた言い方になっている。

(3) 「なでしこ」「色」を除く十九例。

① 思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし (帚木 61頁)

② 山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露 (帚木 61頁)

③ かの撫子のらうたく侍りしかば (帚木 63頁)

④ かの撫子の生ひ立つ有様 (夕顔 164頁)

⑤ かの撫子はえ尋ね知らぬを、 (未摘花 238頁)

⑥ よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまざる撫子の花 (紅葉賀 291頁)

⑦ 枯れたる下草のなかに、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせ給ひて (葵 360頁)

⑧ 草枯のまかきに残るなでしこを別れし秋の形見とぞ見る (葵 360頁)

⑨ 昔覚ゆる花橘、撫子、薔薇、くだになどやうの、花のくさぐさを植ゑて、 (少女 353頁)

⑩かの撫子を忘れ給はず (螢 66頁)

⑪お前に、乱りがはしき前栽なども植ゑさせ給はず、撫子の色を整へたる唐の大和の笹いとなつかしく結びなして、
(常夏 73頁)

⑫撫子を飽かでもこの人々の立ち去りぬるかな。 (常夏 78頁)

⑬撫子のとなつかしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねむ (常夏78頁)

⑭山賤の垣根に生ひし撫子のもとの根ざしを誰か尋ねむ (常夏78頁)

⑮さすがにいとほそく小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。 (常夏 93頁)

⑯撫子などの、いとあはれげなる枝ども取りもて参る、霧のまよひは、いとえんにぞ見えける。 (野分 110頁)

⑰蛸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子の、うち靡きける色もをかしう見ゆ。 (夕霧 216頁)

⑱蛸の声花やかなるに、お前の撫子の夕ばえを一人見給ふには、げにぞかひなかりける。 (幻 340頁)

⑲垣ほに植ゑたる撫子も面白く、女郎花、桔梗など咲きはじめたるに、 (手習 254頁)

①、②は撫子の花であるが、玉鬘を隠喩。③、④、⑤は玉鬘を。⑥は源氏の歌。若宮冷皇帝を隠喩。⑦亡き葵上方の庭の花、幼い夕霧を暗示。⑧は源氏の歌。夕霧を隠喩。①から⑧まではいずれも「撫でし子」、「愛撫していた子」、「いとし子」の意で用いられている。⑨は花散里方の庭の様子。⑩玉鬘。⑪は玉鬘方の植込みの様子。やはり玉鬘を暗示。⑫も玉鬘を。⑬は源氏の歌で玉鬘を隠喩。⑭は玉鬘の返歌で⑬に同じ。⑮は近江の君が結び文を撫子の花につけて女御に差しあげたというのだが、そこには、やはり玉鬘との対偶意識が働いたアイロニカルな表現がある。⑯は

野分の朝、秋好中宮方の庭で童女達を庭に下して、風に散らされた枝などを取り集めさせているところ。⑰は落葉の宮の植込みの様子。『古今』恋四、「あな恋し今も見てしが山賤の垣ほに生ふる大和撫子」による。夕霧の落葉の宮へ

の心の傾斜を微妙に表現。⑮紫上なき後、植込みの撫子の夕ばえを源氏が一人で眺めなさっているところ。⑯、⑰には、落葉の宮、紫上など、夕霧や源氏の、それぞれに愛する女性への隠喩がほのかな形で表現されている。⑱小野の山里の植込みの様子。ここでは、女郎花が中将の浮舟に対する思いとして形象化されていく。撫子には三つの系統の意味が微妙に重ねられながら用いられている。いとし子の意と、愛する女の意と、花の撫子の意であり、その用いられ方はかなり意図的であり、ある一つの、重要な意味を読みとることができるようにつかわれている語彙だと考えられる。『古今和歌六帖』を読んでいくと、①から⑧までのようなつかわれ方は一般的ではなく、⑯、⑰のような意味で用いられていることがわかる。「うつくしとみるたびことになでしこの花の名残はめぐしやはあらぬ」(362)も、どうやら前者ではなさそうだから、すべて後者になってしまふ。勅撰集の『後拾遺』までの歌を拾っていくと、『後撰』巻四、夏、203の歌に「師尹朝臣のまだわらはにて侍りける、とこ夏の花ををりてもちて侍りければ、この花につけて内侍のかみの方におくり侍りける 太政大臣」と詞書きがあり、「なでしこはいづれともなくにほへどもおくれさくはあはれなりけり」とあるのは、それをふまえてもいる。ところが、『後拾遺』第十哀傷に「一条院うせさせたまひてのちなでしこのはなはべりけるを後一条院をさなくおはしましてなにごころもしらでとらせたまひければおぼしいづることやありけん 上東門院」の詞書きを有する歌「みるままにつゆぞこぼるるおくれにしこころもしらぬなでしこのはな」(569)は、明らかに①⑧と同じ発想の歌である。帚木の巻と紅葉賀の巻で、こうした発想の歌をふまえて、玉鬘と冷泉帝の幼少の物語を対偶的に構成し、更に葵巻で幼い夕霧の物語を形象化していく紫式部のしたたかな技法に驚かざるを得ない。玉鬘物語を、「撫子」の語を軸にして展開していく作者の用意は、実に徹底したものになっている。そして、こういう視座に立って、桐壺の巻の「をはな」「をみなへし」「なでしこ」の例の異文を読んでいくと、桐壺の巻の物語の位相は、帚木の巻から紅葉賀、葵の巻へと対偶的に構成されていく物語とは別の次

元に立つものであったと考えなければならない。源氏物語の結集と整理、再編成は、この異文の存在を前提とする限り、従来考えられてきたような一次元的なものではなかったとしなければならない。帚木、空蟬の巻の本文と物語の享受とのかかわりの中で、更に稿を改めてそうした実態を考えてみたい。

資料 1 ⑧・⑨

第一類

⑨まさなき——さかなき・⑨戸——戸とも・⑨奉りし——き給し

第二類

⑧うまれ——生まれ 陽・⑧御子の——御子 麥・⑧御子——みや 陽、御、麥、国・⑧心苦しう——心苦しき物に 国、麥・

⑧御局——むほんそうし 麥・

⑨衣——裳衣 陽、御、国・⑨こと——ことも 陽、麥・⑨あり——おほかり 麥、御、国・⑨又——ナシ 陽、御、麥・⑨時には——時は 国、麥・⑨馬道——みち 陽、御・⑨さしこめ——さしかためなと 陽、麥・⑨かなた——かなたに 御・⑨煩はせ——煩はし 御、陽、国・⑨いみじうせ——いみしきよらをつく 麥・

第三類

⑨いみしきよらをつく——いみしきよらをせ 陽・

第四類

⑧軽き——わろき 陽・⑧方にも——方も 国・⑧後は——後には 陽・⑧いと——ナシ 陽・いとと 国・⑧おきてたれば

——おきてたるけしきなれば 陽・⑧坊——とう宮 陽・はら 国・⑧この御子の——これを 陽・このきみを 国・⑧なめりと
——なめりとささめく人——あるを 陽・⑧女御は——女御はあさましく 陽・めさましう 国・⑧先に参り給ひ——ことにまい
りて 国・⑧御思ひ——方の御おほえ 陽・御思ひも 国・⑧なども——もあまた 陽・なともおほく 国・⑧御いさめ——いさ
め 国・⑧のみぞなほ——そすこし 陽・のみぞ 国・⑧煩はしう心苦しう思ひきこえさせ給ひ——煩はしき事にはおほしめし
陽・⑧きずを——きず 国・⑧多く——多かるに 陽・⑧か弱く——いとか弱し 御・よはて 国・⑧をそ——そ 麥・のみ 国
・ナシ 陽・⑧桐壺なり——桐壺なりけり 陽・桐壺になんありける 国・⑧御方々——御方 麥・⑧ひま——たくひ 麥・⑧人
——おほくの人—— 陽・⑧ことわり——ナシ 国・

⑨うちしきる——うちしきりたる 国・⑨打橋渡殿——ナシ 陽・打橋渡殿のほと 国・⑨道に——めんたううちはしわた殿な
とやうの道にも 陽・⑨わざ——わざとも 国・⑨しつ——したきつつ 陽・⑨御送迎——御むかへおくり 国・⑨馬道の戸
——馬つちとをも 国・⑨さしこめ——さし 国・⑨心を——御心を 陽・の心 国・⑨時——おりおり 国・⑨数知らず——ナ
シ 陽・⑨苦しき事——苦しさ 国・⑨のみ——のみかすしらすなり 陽・⑨いと——なにと 国・⑨いたう——いたうよを 陽
・⑨わびたる——わたる 国・⑨いとどあはれと御覧じて——いとあはれなるものにおほしめして 国・⑨もとより——もと 陽
・⑨上局——上の御局 国・⑨賜はす——賜はすこれにつけてもきくにき事ともおほくてまして 陽・⑨その——この 陽・な
の 御・⑨御子——きみの 国・⑨なり給ふ——なる 国・⑨事——事あり 陽・⑨劣らず——け劣らず 御・⑨給ふ——給へは
陽・⑨それ——これ 国・⑨世の——かの 国・又世の 麥・⑨そしりのみ——そしり 陽・⑨御子——きみ 国・

第五類

⑧居——すゑたてまつり 陽・国・⑧おぼえ——むねつふれてきることやと 陽・国・⑧御蔭をば——御蔭を 陽・国・⑧人
——人々 陽・国・⑤ものはかなき——はかなき 陽・国・⑧給ひて——給ひつつ 麥・陽・国・御・⑧御心——心 国・麥・

⑨をりく——時 陽、国・をり 麥、御・⑨すそ——すそも 国、麥・⑨多かり——あり 陽、国・⑨やらむ——やる 陽、
国・⑨宮——みこ 陽、国・

第六類

⑧し給ふ——人そいと心くるしけなる 陽・人そ心くるしけなる 国・⑧ながら——させながら 陽・させ給ながら 国・
⑨曹子——御つほね 国・つほね 陽・

資料 2 ⑩・⑪

第一類

⑩物を——物・⑩入らせ——入りゐらせ・

第二類

⑩めづらしき——めづらかなる 陽、麥・⑩見え給ふを——見え給へは 陽、麥、国・⑩えそねみ——えにくみ 陽、麥、国・
⑩知り給ふ人——知り給へる人 陽、国、麥、御・⑩まかでなむ——まかてなん 陽・⑩忍びてぞ——忍ひて 陽、麥・
⑪いふ方なく——いふ方なくかなしと 陽、麥、国・⑪おもはさる——おほさる 陽・⑪え聞え——聞え 国、麥、御・⑪いか
さまに——いかさまにか 麥、御・⑪おぼしめし惑はる——おほし惑ふ 陽、国、麥・⑪え許させ——許させ 麥、御、国・

第四類

⑩およすけもて——やうくおよすけ 陽・おかすけもて 御・⑩心ばへ——ありさまよに 陽・人こそ 御・⑩見え給ふを
——見へ給へは見たてまつるかきりの人々は 陽・⑩はへ——はて 国・⑩心——心を 国・⑩おはするものなりけり——おはす
なりけり 麥・おはしけり 国・⑩あさましまで——あさましまにて 御・⑩こち——御こち 陽・こと 国・⑩煩ひ——

煩ひそめ給 国・⑩まで——まかて給 麥・⑩給ふを——給へは 国・⑩いと——いとい 御・⑩年ごろ——年ごろは 陽・⑩常の——の 国・⑩なり給へれば——ならひ給へれば 麥・なりにたれば 国・なり給へは 陽・⑩暫し——ナシ 国・⑩のみ——ナシ 国・⑩のたまはするに日々におもひ給ひてただ五六日のほとに——のたまはせて五六日にある日々にをりて 陽・のたまはするに日にそへてよりは給ひてた五六日のほとに 麥・⑩のほと——ナシ 国・⑩をりにも——をりしも 麥・をりに 国・⑩あるまじき——あさましき 国・⑩もこそ——もこそなと 国・もこそなとて 麥・⑩奉りて——させ奉りて 麥・⑩忍びて——しにて 御・ナシ 国・⑩いで給ふ いてさせ給ふ 麥・⑩さのみも——ナシ 国・

⑩おぼつかなさ——いふせき 陽・をいふかたなく 国・おほつかなきこと 御・⑩いとにほひやかに——にほひやかに 国・いとにほひかに 麥・⑩美しげなる——美しき 陽・⑩いとう面やせていと——いとう面やせていと 国・いたく面やせていと 陽・いたえおもやせていとと 御・⑩しみながら——しみたる物から 国・⑩も聞えやらず——は聞えす 陽・きこえ給はす 国・⑩御覽するに——御覽するそ 国・⑩よろづの事を泣くく——我もなくくよろづ 陽・つつなをよろづの事を泣くく 国・⑩のたまはすれど——たまはすれと 国・⑩御いらへもえ聞え給はず——ナシ 陽・⑩たゆげにて——たゆけなり 国・⑩いとど——ナシ 陽・⑩我かのけしき——我か 国・⑩にて臥したれば——なれば 陽・⑩いかさまに——いかさまにせん 陽・⑩惑はる——惑ふる 御・⑩入らせ給ひて——入らせ給ひても 陽・入りおはしましては 麥・⑩許させ——許しやら 陽・⑩あらん——ある 国・⑩契らせ給ひける——こそ契りつる 陽・⑩さりとち——ナシ 陽・⑩のたまはする——そおほせられやらす 国・いひやらせのたまはす 陽・

第五類

⑩世に——世には 国、陽・⑩奏して——いとま奏して 国、陽・⑩奉り給ふ——給ふ 陽、御・
⑩おもほさる——おもほしめす 陽、国・⑩臥したれば——臥し給えれば 国、麥・⑩え行きやらじ——さりとちえ行きやらし

陽、国・

第六類

⑩弱うなれば——弱くなりたまひぬれば 陽・弱けになりたまひぬれば 国・

⑪つつものし——つつなき 陽・てなき 国・

資料 3 ⑫・⑬

第一類

⑫かくながら——かうなから ⑬ひまなく——ひまなう

第二類

⑫絶え——きえ 麥・⑫たゆげなれば——たゆげなればたた 御、陽、麥・⑫おぼしめすに——おほせと 陽、麥・⑫けふ始む
べき祈禱——すほう 陽・⑫ども——あまはしむべきよしなと 麥・⑫こよひ——やかてかしこにてこよひ 陽、麥・⑫と——
あるへければ 陽、麥・⑫聞え急がせば——ナシ 陽・⑫思ほし——思ほしめし 陽、麥・⑫ふたがりて——ふたからせ給て 陽、
麥・

⑬給ひぬる——たまひぬ 国、麥・⑬こもり——いみしくてこもり 陽、国、御、麥・⑬いと御覽ぜ——御覽せ 陽、麥・⑬御
涙の——御涙 麥・⑬給へるを——給へり 国、麥、御・⑬事にだに——事だに 陽、麥・⑬作法——やう 陽、麥・⑬のぼりな
ん——も 麥・

第三類

⑫ともあまはしむへきよしなと——ともあまはしむへき事 陽・ともはしむへき事さへ 国・⑫させたまうつ——給う 陽、

国、麥、御・

第四類

⑫女も——女 国・⑫いみじ——いみしういとをしと 国・⑫いとかく思う——いとうく思う 御・いとかう思ふ 陽・⑫つつ聞え——て消えさせ 御・⑫まほしげなる——まほしき 陽・⑫苦しげにたゆげなれば——心苦しげなるやうなれば 国・⑫たゆげなれば——てむげにきえいるやうなれば 陽・⑫なれば——なれと 御・⑫ならむ——あらむ 麥・⑫おぼしめすに——おもほしめせと 国・⑫と——はじめけるを 国・⑫祈禱——御いのり 御・⑫承れる——承はれり 御・承はれは 国・⑫御胸——御胸の 国・⑫つゆ——そののちやかてつゆ 陽・⑫まどらまれずあかしかねさせ給ふ——まどろませ給はす 陽・まどろまれますあかしかわさせ給て 国・⑫行きかふ——行きちかふ 陽・⑫ほとも——もほと 麥・⑫なきに——ナシ 陽・⑫夜中うち過ぐるほとに——夜中過くるほとにいま 陽・

⑬参りぬ——参りたるを 陽・⑬御心惑ひ——御心惑ひて 陽 御心惑ひして 国・⑬おぼしめし——おほしめされす 陽・おほされすさらに 国・⑬御子——宮 陽・⑬まほしけれど——まほしくおほしめせとも 国・⑬給ふ例——給ふは例は 国・給ふ例は 陽・⑬なき事——ことに 国・⑬人々の——人々 御・⑬ひまなく——さらにひまなく 国・⑬流れ——て 陽・流れて 国・⑬給へるを——給も 陽・⑬の悲しからぬ——悲しきからぬ 御・⑬はなき——やうはなき 陽・⑬まして——まいてつきせす 陽・⑬作法——こと 国・⑬けぶりに——いふりにも 御・⑬泣きこがれ給ひ——泣きこがれ 陽・⑬女房の——女房 御・⑬乗り給ひて——乗りて 陽・⑬いかめしう——いかめしうて 国・

第五類

⑫はするを——はするをむせかへらせ給御さまを 陽、国・⑫いと——ナシ 国、麥・⑫見奉り——見奉り給 陽、国・⑫御胸——御胸のみ 御、麥・⑫なほ——なほこころもとなく 陽、国・⑫いふせさを限りなくのたまはせつるを——いふせきにあかし

かねさせ給 陽、国・⑫絶えはて給——はてさせ給 陽、国・

⑬いとあへなく——あへなく 国、麥・⑬きこしめす——きこしめすままに 陽、国・⑬おぼしたらず——おほしたえす 陽、国・⑬さぶらふ人々の——御めのととも 陽、国・⑬わざなるを——かさなれば 陽、国・⑬いふかひなし——くちをしけなり 陽、国・⑬限りあれば——さてもいふかひなければ 国、陽・⑬奉るを——奉る 陽、国・⑬いと——ナシ 陽、国、麥・

第六類

⑫けふ——すほうなと 国・すほうなとも 麥・⑫ならむを御覧じはてむ——なりはてんをたにみはてん 陽・なりはてんをみる 国・

資料 4 ⑭・⑮

第一類

⑭惑ひ——まろひ

第二類

⑭勅使来て——あり 麥・⑭悲しき事——いと悲しきわさ 国、麥・⑭ひとときさみ——ひとときは 麥・⑭と贈らせ——とてかくせさせ 陽、麥・⑭憎み——やすからす憎み 陽、麥、御・⑭物思ひ知り給ふ——すこしものあはれ知り給へる 麥・⑭事にそへて 陽、麥、御・⑭憎みがたかりし事——憎みところなかりし 陽、御、麥・

⑮おぼしいづる——おもひいてたまふめる 陽、麥・⑮人がら——けに人から 陽、麥、国、御・⑮わさ——御わさ 陽、御、麥・⑮などにも——なとも 陽、国、麥・⑮悲しう——こひしく 陽、国、麥・⑮あとまで——につけても 陽、国・⑮人の——ナシ 御、麥・⑮見奉らせ——見奉り 麥・⑮いでつつ——いてられて 麥・⑮親しき——親しくさふらふ 陽、麥・

第三類

⑭すこしもののおはれ知り給へる——すこし物の心知り給へる 陽・物思ひしり給すこし物のおはれしり給へる 御・⑭にそへて——にそへても 国・

⑮いてられて——いてらるれば 陽・

第四類

⑭いかばかりかは——いかばかり 陽・⑭思ふ——のみおほゆる 陽・⑭今は——ナシ 陽・⑭ひたぶるに——ナシ 国・ひたふるにも 陽・⑭のたまひつれど——のたまへれと 陽・のたまへと 麥・のたまひつれば 御・⑭車よりも——車より 国・⑭もて煩ひきこゆ——くるしうみたてまつる 国・もて煩ひたてまつる 陽・⑭御使——も御使 国・⑭三位の位——おほきみつのくらいを 御・三位の位を 麥・⑭給ふよし勅使來てその——ナシ 陽・給て 国・給ふよりあり勅使來てその 御・⑭なん——をきくに 陽・なんと 御・⑭なかりける——またまさりてかきりなくなえたえかたし 陽・⑭だに——ナシ 国・⑭なりぬるが——なりぬるを 国・⑭おぼさるれば——おほされければ 陽・⑭ひとときさみの位——ひとときさのくらい 御・ひとつきのくらひを 国・ひとときさみ 陽・⑭贈らせ——そへおくらせ 国・⑭これにつけても——それをも 陽・⑭人々——人 麥・⑭多かり——ナシ 御・多かりけり 陽・⑭など——ナシ 陽・

⑮事など——なと 国・⑮あしき——あしかり 国・⑮すげなう——すけなかりしか 国・⑮情ありし——なさけしかりし 陽・なさけつきてありし 国・⑮御心を——御心なと 陽・ことを 国・⑮そねみ給ひしか——ナシ 国・⑮上の——上の御かたち 国・⑮なども——ともも 陽・⑮恋ひ忍び——こひしかり 国・⑮とは——と 麥・⑮かかるをり——これか事 陽・かくるをり 御・⑮など——ナシ 御・⑮ほど——ほとと 陽・⑮せむ方なう——せん方なく 陽・⑮おぼさるるに——おほしめさるれば 陽・おほす 国・⑮御宿直——殿る 麥・⑮絶えて——ナシ 御・さらに 国・⑮ただ——たたよるひる 陽・⑮ひちて——ひちて

そ 国・⑮暮させ——くらし 陽・⑮給へば——給 国・給へるは 麥・⑮人——人々 陽・⑮あくまじかりける——やすからさ
りける 国・⑮などには——なんと 国・⑮ゆるしなう——ゆるしなく 陽・⑮のたまひける——のたまはせける 国・⑮宮を
——宮 国・⑮見奉らせ給ふにも若宮の恋しさのみおもほしいでつつ——見奉りけるにもまつわかみやそおもひゝてられこひしく
おほして 国・見奉らせ給ふにつけても若宮の御恋しさつきせずおほしめしいてらるれば 陽・⑮御乳母——乳母 麥・乳母を
御・

第五類

⑭かひなければ——かなしければ 陽・麥・⑮すげなうそねみ——すけなくものし 陽・麥・⑮とぶらはせ——とはせ 陽・国
・⑮つかはしつ——つかはして 国・御・

第六類

⑭に——所に 陽・ところへ 国・⑭こち——こちけに 陽・こちけにいみし 国・⑭なほおはする——なをくはする
御・なをくおはする 国・

⑮御乳母——御めのたち 国・御乳母たち 陽・

資料 5 ⑬・⑭

第一類

⑬はかなく——はかなう・

⑭はづかしうなむ——はづかしうなん・⑭まじく——まじう・⑭侍りけれ——いへりけれ・

第二類

⑬にはかに——ナシ 麥・⑬命婦といふ——命婦 陽、麥・⑬夕月夜の——夕月夜 陽、國、麥・⑬せさせ給ひしに——にも
麥・⑬かたちの——かたちなどの 御、麥・⑬おぼさるゝにも——おほさるゝも 陽、御、國・⑬やみにくれて——をくれやみに
て 麥・

第三類

⑭え物ものたまはず——物もえいひやりたまはず 麥・⑭方なく——よなく 陽、國、麥・

⑮かたちなどの——かたちなど 陽・⑮をくれやみにて——をくれまとひて 陽、國・

第四類

⑯有様を——有様は 國・⑯野分たちて——野分して 陽・のあきたちて 御・のあきして 國・⑯はだ寒き——はたさむく
すゝしき 國・⑯夕暮のほど——夕暮に 陽・夕暮のほと 國・⑯おぼし——おほしめし 陽・⑯多く——おほえ 御・⑯つか
はず——つからす 御・⑯夕月夜——ゆふつくら 御・⑯命婦といふ——命婦と 御・⑯やがて——ナシ 國・⑯かうやうの——
かうやうなる 陽・⑯御遊——遊 麥・⑯心——は心 御・⑯音を——ゐを 御・ね 國・⑯鳴らし——たて 陽・⑯きこえ——
きこえさせ 陽・⑯言の葉も——言のと 御・⑯ことなりし——まさりて 國・⑯うつつには——うつつに 御・⑯着きて——て
陽・⑯門——ナシ 國・⑯つくろひ立て——ナシ 陽・つくろひ立て 國・⑯にてすぐし給へる——なりしすまる 陽・にてす
くし給へるすまるお 國・⑯くれて——くれ 御・

⑰伏し沈み——ふしたつこ 御・⑰給へる——給 國・をけに此 麥・⑰草も——草 陽・⑰高く——ふかく 國・⑰月影——
月の影 御・⑰にも——に 國・⑰母君も——母君 麥・⑰え物ものたまはず——物もえのたまひいてす 御・⑰とまり——とま
りて 陽・とくさり 御・ととまり 麥・⑰かゝる——かえる 御・かく 國・⑰もいと——なんいと 陽・も 麥・⑰はづか
しうなむ——はつかしくなむ 國・はつかしう 陽・⑰泣い——泣き 陽・⑰参り——参り侍 國・⑰いとど——中々いと 國・

⑦心苦しう——ナシ 御・苦しう 麥・⑦心肝もつくるやうになんと——ものおもふたまへられすなと 陽・心もつきはつるやうになんと 国・⑦物思う——まことに物思う 陽・⑦給へ——ナシ 陽・⑦こち——心 国・身 御・⑦いと——ナシ 陽・⑦忍びがたう——忍ひかたく 陽・⑦侍り——侍れとて 国・⑦とて——と 陽・⑦仰言伝へ聞ゆ——そ仰言伝へ聞ゆる 御・御せうそこ伝へ聞ゆ 陽・ナシ 国・⑦しばしは夢か——夢 国・⑦たどられし——まとはれし 国・⑦堪へがたきは——堪へかたきを 御・⑦いかに——いかさまに 陽・⑦かとも——かあらんとたに 国・かと 陽・⑦人たになきを——かたたになきかわりなきに 陽・

第五類

⑯有様——み有様 御、陽・⑯人より——人に 陽、国・⑯命婦——命婦は 陽、国・

⑰よもぎふ——よもぎ 陽、国、御、麥・⑰給ふ——給へる 陽、国・⑰典侍の——典侍 陽、国・⑰わざ——事 陽、国・

第六類

⑱野分にいとど——のあきいたう 御・のあきいたうところところ 国・野分にとところところ 陽・⑱母君も——母君あひたまへれと 陽・あひたまへり 国・⑱憂きを——憂きに 陽・心うきに 国・

資料 6 ⑪・⑫

第一類

⑬光にてなん——光にてなむ

⑭思う給へ——思へ給へ ⑮えなん思ひ——えなむ思ふ

第二類

⑬では——て 陽、御、麥、国・⑬給ひなんや——給てかひなき御物かたりをたにとなん 国・⑬給ふも——給ふらん 陽、国、麥・⑬承り——承りも 陽、国、麥、御・⑬やう——さま 麥・⑬うち紛るゝ——うちも紛るゝ 御・⑬人を——人も 御、麥、国、陽・⑬今は——くちおしく今は 国、麥、御・

⑭とあれ——なとあれ 陽、御・麥・⑭思う給へ——ナシ 陽、麥、御・⑭いかに——いかて 陽、御、国・⑭のみなむ——のみ 陽、御、麥、国・

第三類

⑮給ひてかひなき御物かたりをたにとなん——給てかひなき御物かたりをたになん 麥・給てかひなき御ものかたりもなん 陽・⑮くちおしく——くちをしう 陽・

第四類

⑯おぼさるゝ——おほしめさるゝ 陽・⑯参り——参らせたてまつらせ 陽・⑯はかくしう——はかくしく 陽・はかくしうおほさるる事 麥・⑯のたまはせ——のたまひ 御・⑯やらす——ず 国・⑯給ひつつ——給ひて 国・⑯心弱く——心弱くと 陽・⑯おぼしつつまぬ——おもほししのはぬ 陽・おほしつくさぬ 御・⑯しもあらぬ——もあらぬ 国・しもならぬ 御・しもおはしまさぬ 陽・⑯なむ——なん 陽・ナシ 国・⑯すこし——すみしも 麥・⑯すぐす——すぐる 陽・⑯いと——はいとと 国・⑯わりなき——いとわりなき 国・⑯なむ——なん 陽・⑯はぐくまぬ——えもはぐくまぬ 国・⑯なほ——ナシ 陽・⑯ながらへて——なすらへ 麥・

⑰など——と 国・⑰吹き——ひき 御・⑰え見給ひはて——えも見はて給はす 陽・え見給はす 国・⑰つらう——つらく 陽・つらきを 国・⑰思う給へ知らるる——思ふ給へらるる 陽・思う給知らるる 麥・⑰事だに——事も 麥・⑰思う給へ侍れ——おもひ侍れ 国・⑰行きかひ侍らん事はまして——行きかふ人の思ひ侍らん事も 陽・⑰はばかり多くなむかしこき——つつ

ましうてかかる 陽・ははかりおほえてなんかしこき 国・¹⁹たびく——ナシ 国・¹⁹みづからは——ナシ 陽・¹⁹なん——ナシ
国・¹⁹たつまじき——たつまじきを 麥・¹⁹急ぐめれば——わろくめれば 御・¹⁹なと——かやうに 陽・なんと 国・¹⁹思ひ給
ふるさまを——ナシ 国・¹⁹奏し——すこし 麥・

第五類

¹⁸人も——人の 陽、国・¹⁸見奉らむと——見奉らん事を 陽、国・¹⁸うち——ナシ 陽、国、麥・
¹⁹もしき——まいてももしき 陽、国・¹⁹まして——ナシ 陽、国・

第六類

¹⁸見奉らむと——見奉らんと 御 見奉ららん事を 陽、国・
¹⁹急ぐめれば——急きおはしためは 陽・急きおはすめは 国・

資料 7 ²⁰・²¹

第一類

²⁰堪へがたき——ナシ・²⁰片端をだに——片端

第二類

²⁰身に——身にも 国、麥・²⁰なむ——なん 陽・²⁰くはしう御有様も——御有様もくはしく 御、麥・²⁰とて急ぐ——と急ぐ
陽、国、御、麥・²⁰ばかりに——はかりないと 国・²⁰わたくし——御わたくし 陽、御、国・²⁰ついでにて——ついでにのみ
陽、麥・²⁰消息——つかひ 陽、国、麥・²⁰見奉る——見奉るか 御・²⁰とて——とも 麥・

²¹侍りしかば——しかは 御、麥・²¹人も——人 陽、麥、国、御・²¹つるを——しを 御、麥、国・²¹そねみ——御そねみ

麥・御・②なり添ひ侍りつるに——なり添ひて 麥・②御志——御心はへ 陽・国・②これもわりなき心のやみになん——ナシ
陽・国・麥・②夜も——いたう 麥・②あながちに——あやしくあやにくに 麥・②長かる——かく長かる 陽・御・麥・

第三類

②御有様もくはしく——御有様もくはしう 陽・②なんいと——なん 御・麥・

②なり添ひて——なり添ひ 御・②いたう——いたく 陽・②あやしくあやにくに——あやしく人のおとろくに 陽・あやしく
人の 国・

第四類

②いまくしう——さかくしう 国・②なむと——と 国・②のたまふ——聞こゆ 麥・②宮——わか宮 陽・②見奉りて
——見奉り 麥・②まほしきを——まほしけれと 国・②侍りぬべし——侍りぬらん 陽・②くれ惑ふ——くれるとふ 御・②堪
へがたき片端をだに——かたへ 麥・②はるくばかり——はるけはへる計 国・②心——ナシ 陽・②まで——たちならせ 御
・②年ごろは——年ごろ 陽・②給ひしもの——給へるもの 国・②にて——ナシ 麥・②見奉る——見奉るは 国・②命にも
——命とも 御・②生れし時——生れたまひし 陽・②必ず——なからず 御・②奉れ——給へ 陽・②我——ナシ 国・②くち
をしう——くちをしきかたに 陽・

②後見思ふ——思ひ後見むへき 陽・②なかくなるべき——なかくなへき 陽・②事——世 国・②あまるまでの——あま
るまで 陽・あまりて 国・②よろづに——よろづ 麥・②に人げなき恥を——はかりにおもて 陽・によろづ人げなきはしをも
国・に人げなき恥をは 御・②かくし——かくし侍り 国・②給ふめりつるを人のそねみ深く積りやすからぬ事多くなり添ひ侍り
つるに——侍つるについに 陽・②深く——深き 国・②横さま——ついに横さま 国・②かへりて——かつ 国・②御志を——
御志をも 御・御心ひとつとも 麥・②いひも——いひ 御・②夜も——夜いたう 御・②御心——心 国・②おぼされ——おほ

しめされ 国・㉑まじき——まし 御・㉑けりと——けりいと 国・

第五類

㉑なむと——なと 御、麥・㉑うれしくおもたゝしき——おもたゝしううれしき 陽、国・㉑大納言——大納言も 陽、国・

㉑おかれ侍り——をき給 陽、国・㉑思う給へ——思ひ給 陽、麥・㉑遺言を——遺言 陽、麥・㉑御志——御心ばへ 国、陽・
㉑よろづに——ナシ 国、陽・㉑侍りつるに——ナシ 麥、御・㉑つひに——ナシ陽、国・㉑思う給へられ侍る——思ひきこえ
させ侍る 陽、御、国・㉑むせかへり——なき 陽、国・㉑ふけぬ——ふけゆけは 陽、国・

第六類

㉑堪へがたき片端をだに——すこし 陽・すこしだに 国・

㉑まじき——ましかりけるちきり 陽・ましきちぎり 国・

資料 8 ㉑・㉒

第一類

㉑人わろう——人わろく ㉒はつる——侍 ㉒涼しく——涼しう

㉑さうくしく——さうくしう

第二類

㉑なむ——なん 陽、御・㉑心を——心 麥、御・㉑あらじ——とゝめし 麥・㉑思ふ——思ひし 陽、御、麥・㉑あまた——
あまたの 陽、麥、御、国・㉒をさめむ方——をさめん方の 麥・㉒なきに——なきままに 御、麥・㉒御しはたれ——しはたれ
陽・㉒なり——ふき 陽、国、麥・㉒にくき——かたき 陽、御、国・

②御——さまなる 陽、麥、御、国・②形見に——形見 麥・③残し——残しをき 麥、御・

第四類

②人の契りになむ——人となん 陽・人の御契りになん 御・②世に——ナシ 麥・②事はあらじ——事あらせし 国・②人の
人 麥・②にて——にえ 御・②かう——かく 陽・②方——方も 御・②ゆかしう——ゆかしく 陽・②世——世のちきり
麥・②なんと——なん 陽・②がち——たれがちに 麥・②尽き——尽きも 御・②夜いたう——夜もいたく 陽・②御返り——
御返り事 麥・②いと涼しく——すこしうち 陽・涼しく 国・②草のもと——ところのさま 国・

③乗り——いひ 陽・の 麥・③ただ——ナシ 国・③御形見に——御形見の 陽・③さうぞく——さうなく 御・③一領——
一領かやうの 国・一領かやうのようもやとてのこし給へりける 陽・③物添へ——物を添えて 国・③人々——人々などの 陽
・人々の 国・③事——事を 陽・③いと——ナシ 麥・③など——などを 陽・③きこゆれ——きこえさすれ 御・③事を——
事をのみ 国・③奉らん——きこえん 陽・

第五類

②人——人く 陽、国、御・②いとど——さまになりゆくも 陽、国・②いとど——ナシ 御、麥・②世——世より 陽、国
・②なんと——なんと 御、麥・②しほたれ——しをれ 御、国、麥・②がちに——かちにて 陽、御・②のみ——のみなん 陽、
国・②と——とて 陽、国・②の声々——をしみかほにこえく 陽、国・

③なんと——なんと 陽、国・③とてかかる用もやと残し給へりける 御——ナシ 陽、国・③めく——たつ 陽、国・③思ひいで
——思ひ 陽、国・③給はん——給なん 陽、国・③いと——ナシ 御、麥・

第六類

②世に——思ひなすに 国・思ひなすへに 陽・②しはてくは——てはてには 陽てはては 国・②人わろうかたくなに

なりつるも——いかなりけるちきりにかと 陽・いかなるちきりにかと 国・②と語りて尽きもせず泣くく——など尽きせすか
たるに 陽・と尽きせすかたるに 国・②入方の——入方ちかくなりて 陽・入方ちかくて 国・②清う澄みわたれるに——清く
のとかなるに 陽・清くのとかなるも 国・②もよほし顔なるも——ふりたてたるなとすへて 陽・よりたてたるなとすへて 国

資料 9 ④・⑤

第二類

④うしろめたう——うしろめたく 陽・④まだ——まいりてまた 陽、麥、御、国・④せ給はざりけると——すまちおはしまし
けるをいと 陽、御、麥・④いとおもしろき——おもしろき 御、麥・④御絵——絵 麥、国・④給ふ——給へは 陽、御、麥・
④事——事とも 御、麥・

⑤べし——ナシ 陽、御、国・⑤見えじ——人に見えし 御、麥・⑤経に——経 陽、国・⑤おぼしめさる——おほさる 御、
国、麥・⑤あやまたず——たかへす 陽、麥、国、御・⑤よろこびは——よろこびには 御、麥・⑤思ひ——おほし 国、麥、御

第三類

④事とも——事ともを 陽、国・

⑤人に見えし——人には見えし 陽・⑤おほし——おほし 陽・

第四類

④又——ナシ 御・④思ひきこえ給ひて——思聞給て 麥・④とも——とは 麥・④参らせ奉り——参らせ 陽・④せ給はざり

けると——ざりけるを 国・24 あはれに見奉る——あはれと見奉りけり 国・24 前裁の——前裁 陽・24 おもしろき——おもしろき中に 麥・24 盛りなるを——盛りなりければ 国・24 やうにて——やうにておはしますなりけり 国・24 限りの——限り 国・24 ごう——ごころ 御・24 伊勢貫之——伊勢と貫之と 国・24 ことのはをも——ことのはも 陽・ことはを 国・24 詩をも——詩も 国・24 をぞ——をのみそ 国・24 まくらごと——まくらと 国・まきはしら 陽・24 せさせ——せら 御・24 あはれなりつる——あはれなりける 国・

25 乱りごちに——心ちし侍て 国・乱りごち 御・25 上——こゑ 御・25 乱りがはしきを——乱りかはしくあるを 国・25 をさめざりけるほどと御覧じゆるす——つゆをさまらめとおほしなす 国・25 かう——かく 陽・25 しづむれど——しつめたれと 陽・25 よろづにおほし——おもほし 陽・25 おぼつかなく——おほつかなく 国・25 けり——けるものなりけり 国・25 ものし——ものし給 国・25 よろこびは——よろにひは 国・

第五類

24 思ひきこえ給ひて——おほえ給へは 陽、国・24 四五人——五六人はかり 陽、国・24 物語——物語など 陽、国・24 こまやかに——こまかに 陽、国・

25 上——もと 陽、麥・25 心——心の 陽、国・25 まも——まだに 陽、国・25 深く——深くて 陽、国・

第六類

25 仰言につけても——仰言をうけたまはるにしも 陽・仰言をうけたまはるにつけても 国・

資料 10 26・27

第一類

②⑥思ほす——おほす

②⑦こそ——こそは

第二類

②⑥うちのたまはせ——のたまはせ 陽、麥、国、御・②⑥かたちを——かたちいろあひ 御・②⑥たる——たりけん 御、国・

②⑦こそ——けふらにこそ 国・②⑦なつかしうらうたげなりしを——④ありさまはをみなへしの風になひきたるよりもなよひ 御

・④なてしこのつゆにぬれたるよりも 御、陽、国・②⑦かなはざりける——たれもかなはざりける 陽・②⑦久しく——よのなか物
むつかしうおほされて 陽、麥・②⑦いと——みかといと 陽、国、麥・②⑦かどくしき所——かどくしう 御、麥、国・②⑦けち
とてもなし給ふ——けつ 御、麥・

第三類

②⑥かたちいろあひ——かたちのいろあひも 国・

②⑦ありさまはをみなへしの風になひきたるよりもなよひ——④をはなの風になひきたるよりもなよひ 陽、国・④うらくなつ
かしかりしかたちけはひを——うらくなつかしかりしかたちけはひの恋しさを 御・なつかしかりしかたちけはひを 陽・なつ
かしうらうたけなりしかたちけはひを 国・なつかしうらうたかりしを 麥・②⑦たれも——たれもえ 麥・②⑦かどくしう——か
どくしう 陽・

第四類

②⑥あはれにおぼしやる——あはれおほしやり 御・②⑥ありなん——ありなんと 麥・②⑥長くところ——長らへてとそ 国・②⑥か
の贈物——この贈物を 陽・かの贈物とも 麥・②⑥尋ね出でたりけむ——を尋ねいでたる 国・尋ねいたしたりけむ 御・②⑥かん
ざし——もんざし 御・②⑥いと——ナシ 麥・②⑥楊貴妃の——やうくるひは 陽・長恨歌のやう貴ひか 国・②⑥太液の……ありけ

め——ナシ 陽・②柳も——柳にも 麥・②げに——風 御・②し——けん 麥・②よそひ——よそへ 麥・

②おぼしいづるに——ナシ 御・おもほしいづるに 陽・おもほしいづるには 麥・②音にも——音に 国・②言ぐさに——言
くさには 国・②しに——けるに 国・②物のみ——物 国・②悲しうおぼさるる——悲しくおほしめさるる 陽・悲しうのみお
ほさるる 国・②には——ナシ 陽・には世中むつかり給て 国・②まう——ナシ 国・②夜ふくるまで——ナシ 陽・もいたう
夜ふくるまで 国・夜ふくるまで御 御・②をぞ——お 国・②すさまじうものしときこしめす——すさまじときかせたまふ 陽
・②上人——上人の 麥・殿上人 国・②などは——なと 陽・②あらず——ナシ 麥・②おぼしけちてもてなし給ふ——もてな
しおもひけち給える 国・

第五類

②給はば——たらは 陽、国・②さす——さするにも 陽、国・②すみか——ありか 陽、御・②かける——かきたる 陽、国

第六類

②あはれにおぼしやる——あはれとおほしやれり 陽・いとあはれなりとおほしやれり 国・

資料 11 ②・③

第一類

②給へれば——給へは・②世の人——世人・

第二類

②おぼしめしやりつつ——おほしやりつつ 御、麥・②かたし——いとかたし 陽、御、麥・②給ふとて——給て 陽、国、麥

・²⁸怠らせ——怠り 御、麥、陽・²⁸などはいと——なとほたいと 御、麥・²⁸おぼしめし——おほし 御、国、麥・²⁸歎く——
なやむ 陽、御、麥・

²⁹失はせ——まけさせ 麥・²⁹給ひ——給ひしに 陽、国・²⁹世の中の——世のまつり 陽、麥、国・

第三類

²⁸おほしやりつつ——おもほしやりつつ 陽・おほしやりて 国・²⁸おもほし——をもほし 陽・²⁸はるけう——はるけく 国
・はるけくのみ 陽・²⁸なやむ——なやみ 国・

²⁹おは——をは 麥・むは 陽、御・

第四類

²⁸すむ——すへ 国・²⁸宿——宿と 国・²⁸起きおはします——おはしますに 陽・²⁸右近の——こんえ 国・²⁸おぼし——お
ほしめし 陽・²⁸入らせ——入 陽・²⁸給ひても——給ひぬれと 陽・給ひてもつゆ 国・²⁸まどろませ給ふ——まどろまれ給は
す 国・²⁸あした——あなた 御・²⁸給ふとても——給も 御・²⁸いつるにも——いつるに 陽・いつるらんも 御・いつるも
国・²⁸べかめり——へかんめる 国・へきなめり 麥・²⁸けしき——御けしき 陽・²⁸ばかり触れさせ——よりふされさせ 御・
²⁸などはいと——はいとと 国・²⁸陪膳——御せん 御・²⁸侍ふ——侍ひ 麥・²⁸心苦しき御けしきを——いと心苦しう 陽・心
苦しき御ありさま 国・²⁸近う——近く 陽・²⁸限りは男女 国・²⁸いとわりなき——いみしき 陽・²⁸言ひ
——みな 国・²⁸さるべき——さきによにもさるへき 国・²⁸契り——に 陽・契に 麥・²⁸こそは——こそ 陽・²⁸おはしまし
けめ——おはしけめ 御・おはしますらめ 陽・おはしましけめと 国・
²⁹をも——を 陽・²⁹給はず——給はて 国・²⁹今はた——今は 陽・²⁹をも——を 国・²⁹思ほし——思ほしめし 陽・²⁹い
と——いとと 国・²⁹たいだいしき——たえくしき 陽・²⁹ためし——御ためし 国・²⁹引きいで——引きいてて 麥・²⁹歎き

——歎きあえり 国・㉔参り——参らせ 国・㉔給ひぬ——給へり 陽・㉔いとど——いと 陽・㉔物ならず——ものにもあらず
陽・㉔清らに——かしこく清らに 国・㉔いと——いとと 国・ナシ 陽・㉔ゆゆしう——ゆゆしと 陽・㉔おぼしたり——おほ
えたり 御・おほしめしたり 陽・㉔おぼせ——おほしめせ 陽・㉔まじき——ましけき 国・㉔なりけれ——なれ 陽・㉔おぼ
しはばかりて色にもいださせ給はず——おほしめし 陽・㉔おほしたれど——おほしめしなから 陽・㉔限り——限りに 国・㉔
世の人も聞え——ナシ 陽・世の人もいひ 国・㉔女御も御心——女御の御心も 国・㉔おちる——をかりる 御・㉔給ひぬ——
給にけり 国・給ふよ人もきこゆ 陽・

第五類

㉔給ひぬ——ぬ 陽、国・㉔そこらの——おほくの 陽、国・

㉔触れたる事をば——かたよりたる事は 陽、国・㉔今はた——今はまた 国、麥・㉔まで引きいで——かきあつめ 陽、国・

㉔およずけ——おいなり 陽、国・㉔坊——とう宮 陽、国・

第六類

㉔くるく——くもる 国・くもるる 御・㉔限りは——□の人くくと 陽・人くは 国・

㉔わざなりと——わさかな 陽・わさかなと 国・㉔世の——世の中にも 陽・いとよの中に 国・

資料 12 ㉔・㉔

第一類

㉔べきだに——へき

第二類

③〇方なく——よなく 陽、国・③〇所に——所へ 麥・③〇尋ね——ナシ 御、陽、麥・③〇給ひし——給ける 御、麥・③〇悲しび——ナシ 陽・③〇おぼす——おほしななく 御・③〇恋ひ——いみしう恋ひ 麥、陽・③〇ふみ——御ふみ 陽、御、麥・③〇さとう——さとう 陽・③〇おはすれば——おはししければ 御、麥・③〇え憎み——憎み 御、麥・③〇にも——に 御、麥・③〇には——にも 御、麥・

③①ぬべき——心やはらきぬへき 麥、陽・③①さま——御さま 麥・③①給はず——きこえ給はず 麥、御、国、陽・③①たち——たちも 御、麥、陽、国・③①ましませど——おはしませと 御、麥・③①御方々——いつれの御方々 陽、麥、御、国・③①隠れ——え隠れあへ 陽、国・③①学問——学問を 陽、国・③①琴——はかなき琴 陽、御、麥・③①うたて——そら事に 麥・③①なりける——なる 麥・③①参れる——参りける 御、麥、国・③①忍びて——忍ひやつして 陽、麥、国・

第三類

③〇おほしななく——おもほしななく 麥・おほしなけける 陽・③〇おはししければ——おはしまして 国・

③①心やはらきぬへき——み心やはらきぬへき 国・③①え隠れあへ——隠れあへ 御、麥・③①はかなき琴——はかなき琴 国・③①参りける——参りたりける 陽・

第四類

③〇方なく——よなく 麥・③〇おぼししづみて——おもほしくつみて 国・③〇おはすらん所——おはしにけんかた 陽・③〇御子——宮は 陽・③〇なれむつび——なれ 陽・③〇悲しびを——か悲しきことを 国・悲しさを 陽・③〇のみ——のみそ 国・③〇あまり——ナシ 国・③〇誰もく——誰くも 御・③〇憎み——憎みきこえ 陽・③〇母君なくてだに——母君をはせねはかくたくひなき御さまかたちをみなあはれかり 陽・③〇うたうし給へとて——うたきものにそきこえたまふ 陽・③〇だに——らに 御・③〇にも——にても 国・③〇給ふ——給へる 麥・③〇には——にて 陽・③〇奉り——奉まつらせ 陽・

③なり——にてもたまへり 陽・にしたり 国・③見て——まつ見て 陽・③さまの——御かたちの 御・さま 陽・③給へれば——給へは 御・③女——如 御・③御子——宮 陽・③二所——この御はらには二所 国・③この御腹に——さしならひ 陽・③ましませど——おはすに 陽・③なまめかしう——いみしうなまめかしう 陽・なまめかしう心 国・③おはすれば——いみしうおはすれば 国・③遊ぶさに——遊かたきにそ 陽・③誰も誰も——誰みな 陽・③給へり——たり 麥・給へりける 国・③音に——音を 国・③すへて——すへてすへて 御・③ことくしう——いとことくしく 陽・③うたてぞなり——たたものにもあらずきこへ 陽・③べき——へかりける 国・③人の御さま——御ありさま 陽・③なりける——になんをはしける 陽・③きこしめして——めして 麥・③帝——御と 御・③あれば——ありければ 陽・③この御子——御子 麥・③ころくわんに——みせに 国・③つかはしたり——わたしたてまつり 御・

第五類

③所にだに——所に 陽、国・③給ひし——たまふ 陽、国・③きこえ——ナシ 御、国、麥・③悲しびを——悲しみをのみ 御、国、麥・③かへすく——ナシ 陽、国、麥・③え——なにかは 陽、国・③給はじ——給はん 陽、国・③内に——内にも 陽、御・

③見ては——見てはまつ 国、御・③なずらひ——なずらへ 御、麥・③相人——相人の 陽、国・③ことは——は 陽、国・③いましめ——いさめ 陽、国・③御後見——後見 御、国・

第六類

③べきだにぞなかりける——へくもなきそいとくちをしかりける 国・へきかたなきそいとくちをしかりける 陽・③今——みなみえたてまつり給に今 陽・みえたてまつり給今 国・

資料 13 ⑫・⑬

第一類

⑫限りなう——限りなく

⑬定めなき——定めかたさ

第二類

⑫おはします——物し給 御、麥、國・⑫そなた——そのかた 陽、麥、國・⑫天の下——天下 陽・⑫去りなん——なん 陽、國、麥、御・⑫かく——かくめつらしく 陽、麥・⑫対面し——あひたてまつり 陽、麥・⑫よろこび——よろこひの 陽、國、麥、御・⑫心ばへ——事の心はへ 陽、御、麥・⑫賜はす——賜はせなとしけるを 麥・

⑬おのづから事ひろこりて漏らさせ給はねど——漏らさせ給はねとをのづから事ひろこりて 陽、麥・⑬祖父——御祖父 御、麥・⑬など——なともきゝ給て 御、麥、國・⑬なむ——なん 陽・⑬おはせておぼしよりにける筋——おほしおほせておほしよれる事 麥・⑬無品——むほんの 陽・⑬御世——世 御・⑬後見を——後見 陽、麥、國・⑬事と——と 陽、御・⑬給ふ——給ふに 陽・⑬考へ——かうかへ 陽・⑬同じ——たた同じ 陽、麥・⑬さまに申せば——同じさまになん申たりければ 麥・

第三類

⑫たすくへき——たすくるへく 麥・

⑬もきゝ給て——きゝ給て 陽・⑬おもほしあはせて——おほしめしあはせて 陽・⑬さまになん申たりけれ——さまに申たりけれ 御・

第四類

⑫思は——もてなしおもら 國・⑫率て——率ていて、麥・⑫奉るに——奉れるに 國・奉る 陽・⑫かたぶき——かたぶきて

麥・^{③②}帝王の——いとその陽・わういの 国・^{③②}て見れば——つけては 陽・^{③②}乱れ——ナシ 麥・^{③②}憂ふる——ふる 御・^{③②}たすくる——かたむへき 国・^{③②}べしといふ——と申 陽・^{③②}弁も——弁 国・^{③②}才——才は 国・^{③②}言ひかはしたる——言ひかはしたまふ 国・^{③②}いと——ナシ 陽・^{③②}かへりては——かへりて 国・^{③②}心ばへを——心はへ 麥・心はへをいと 国・^{③②}もいと——も 陽・^{③②}奉りて——たくまつりて 御・^{③②}どもを——とも 国・^{③②}よりも——も 御・^{③②}物——物とも 陽・^{③②}賜はす——賜はせけるを 陽・賜はせなとするに 国・

^{③③}ひろごりて——ひろくなりて 国・^{③③}漏らさせ給はねど——ナシ 御・漏らさせ給はねは 国・^{③③}倭相を——倭相に 陽・^{③③}給はざりける——給はすあり 麥・給はざりつる 国・^{③③}外戚——もんさく 国・^{③③}にて——ことにて 国・^{③③}いと——ナシ 国・^{③③}定めなきを——定めなし 麥・^{③③}なん——をなん 国・^{③③}先も——先の 国・^{③③}たのもしげなめる——たのもしげなる 陽・^{③③}事と——をと 国・^{③③}定めて——定めてみこにはなさしとのたまはせつつ 国・^{③③}才——才とも 国・^{③③}道々の才を習はせ給ふ——御かくもんをせさせたまつり給に 陽・^{③③}賢くて——て 陽・^{③③}にはいと——には 国・^{③③}となり給ひなば——におはせは 陽・^{③③}道の人に——道にも 陽・^{③③}同じさまに——たた内さまになむ 御・同じさまにのみかうかへ 陽・同じさまにかうかへまうさせたりければ 国・

第五類

^{③④}怪しむ——怪しかる 陽、国・^{③④}またその——その 陽、国・^{③④}いと——ナシ 陽、国・^{③④}おほせておぼしよりにける——おほしおほせたる 陽、国・^{③④}筋なれば——事ありければ 陽、国・^{③④}かしこかりけり——かしこかりける 国、麥・^{③④}給ひぬべく——ぬへく 陽、国・^{③④}給ふにも——給ふに 陽、国・

第六類

ナシ

第一類

⑭高く——高う・⑭なく——なう

⑮春宮——とうく・⑮はかなく——はかなう・⑮御心——御心など・⑮おぼし——おもほし・

第二類

⑭をり——時 陽、麥、御、国・⑭給へど——て御覧するにも 陽、御、麥・⑭おぼさるゝだにいとかたき世かなと——おほさるへきもなくありかたき世なりければ 御、麥・⑭うとましようのみ——物うとくのみ 陽、御、麥・⑭おぼしなりぬるに——おほしめしむすはゝれたり 麥・⑭宮の——宮 御、麥・⑭御かたち——御かたちよに 御、麥・⑭すぐれ給へる——すぐれて 御、麥・⑭典侍は——典侍 陽、麥、国、御・⑭親しう——親しく 陽・⑭参りなれたり——参り 陽、麥・⑭おはしましゝ——おはしましける 陽、麥・⑭見奉り——見奉りけり 国、麥・⑭御息所——更衣 麥・⑭伝はりぬるに——ナシ 麥・⑭つけぬを——つけぬに 御、麥・

⑮給へりけれ——給へれ 陽、御、麥・⑮かたち人になん——かたちになん 麥、御・⑮御心とまりて——御心とまりてまいらせたてまつり給へきよし 御、麥・⑮聞えさせ——聞え 陽、国、麥、御・⑮給ひけり——給ひけるを 陽、御、麥・⑮女御のみ心 麥、陽・⑮后も——后 陽、麥、国、御・⑮心細きさまにて——心細くて 国、麥・⑮おはしますに——おはしますらんを 陽、御、麥・⑮と——と 国・⑮ねむころに——ふかう 国、麥・⑮聞えさせ——聞え 陽、国・⑮親王——宮 陽、御、麥、国・⑮うちずみせさせ給ひて——うちずみもし給ひて 陽、麥、国、御・⑮など——と 御、麥・

第三類

⑭おほさるへきもなくありかたき世かなと——おほしめさるへきもなくありかたき世なりければ 陽・おほすへきたにもありか

たき世なりけり 国・③おほしめしむすはゝれたり——おほしめしむすはおれたるに 国・おほしむすはゝれたり 陽・

③かたちになん——かたちなり 陽・かたちにぞ 国・③御心とまりてまいらせたまつり給へきよし——御心とまらせ給へは
まいらせたまつらせ給へきよし 陽・③心細くて——心細く 陽・③もげにかう——もげにかく 麥・けにかく 陽・

第四類

③なし奉る——なり 国・なし奉らせ 陽・③に添へて——こころへて 御・③御事を——事を 麥・御事 陽・③なすらひに
——なすらに 御・なすらへ 麥・なすらひにたに 陽・③うとましう——うとましと 国・③よろづに——よろづを 御・③四
の宮の——女四のみこ 国・③給へる聞え——たる名 陽・③高く——ナシ 国・③母后世——を母后 陽・③給ふを——給けり
陽・③先帝——先わう 国・③親しう——親しきを 国・③なれたり——かよひ 国・③いはけなく——いときなく 麥・③時
——ナシ 国・御時 陽・③御かたち——かたち 国・③似給へる——に給ける 麥・なすらはせ給へる 陽・③人を——人の
国・③つけぬ——侍らぬ 陽・③こそ——にて 国・③よう——よく 陽・③おぼえて生ひいでさせ——おほえ給ておいゝて
国・③給へりけれ——給に 国・

③ありがたき——たくひありかたき 陽・③けるに——たるに 国・けるを 陽・③母后——母后の 麥・③更衣の——みやす
所も 陽・③しためし——けりしためし 陽・③てすがくしうもおぼしたたざりける——つる 国・てすがくともおぼしたた
ざりける 陽・てすがくしうもおぼしたたざりし 麥・③我が——ナシ 陽・③女御子——御子 国・女宮 御・③給ふ——
給へは 陽・給に 国・③人々御後見——人後見 国・③せうと——をとと 御・③心細くて——心細うて 御・つれくと 陽
・心細くきよらにて 麥・③よりは——より 麥・③も慰むべく——もと慰め給へく 国・もやれかし 陽・とも慰むへく 麥・
③など——ナシ 国・③おぼしなりて——さため給て 陽・③り給へり——らせ給てけり 陽・③ときこゆ——ときこゆる 御・
③げに——ナシ 陽・

第五類

③④ べく——たまふへく 陽、国・③④ 人々——人々を 御、陽、国、麥・③④ いはけなく——ちゐさく 陽、国・

③⑤ まこと——きこしめしてまこと 陽、国・③⑤ あらはにはかなく——いとほはなく 陽、国・③⑤ ゆゆしう——ゆゆし 陽、国・

③⑥ 同じ——ナシ 御、国・③⑥ いと——せちにいと 陽、国・③⑥ 藤壺——御つはねは藤壺 陽、国・③⑥ ときこゆ——なり 陽、国・

第六類

③⑦ に伝はりぬるに——つかうまつりつるに 陽・つかまつりぬるに 国・

③⑧ 有様——有様はきこしめしゝにたかはすめてたきにそへてもけに 陽・有様きこしめしゝにたかはすめてたきにそへてけに

国・

資料 15 ③⑥・③⑦

第一類

③⑥ しげく——しけう

③⑦ 常に——つるに ③⑦ あやしく——あやしう ③⑦ らうたく——らうたう ③⑦ ゆゑ——ゆゑに

第二類

③⑧ まさりて——まさり 陽、国・③⑧ 思ひなし——思ひやり 陽、麥・③⑧ 人も——てたれも 陽・③⑧ え——えおもひ 御、麥・③⑧ 人の——人も 麥・③⑧ さりしに——さりしにいと 麥、国・③⑧ 志——志の 麥・③⑧ 去り——さけさせ 陽、麥・③⑧ をまして——ほとに 国、麥・③⑧ 御方——方 御、麥・③⑧ え恥ぢあへ——ましてえかくれあへ 陽、麥・③⑧ 給はず——させ給はず 麥・③⑧ おばい——おほし 陽・③⑧ めでたけれど——めてたうこそはおはすれみな 麥・③⑧ おのづから——あさゆふにさふらひたまへは 陽、

国・³⁶漏り見奉る——見奉り給に 麥・³⁶御息所も——御息所 御・

³⁷若き——おさなき 御・麥・³⁷て見え給ふ——きこえためる 陽・国・³⁷なんなど——とつねに 国・麥・³⁷聞えつけ——聞えさせ 国・麥・³⁷給へれば——給ふを 陽・麥・国・³⁷をさな——をさなき 御・麥・³⁷にも——にもうれしくおもひて 国・麥・³⁷ても——おかしきさまに 麥・国・³⁷女御——女御は 国・御・麥・³⁷とも御中そばくしき——を心よからすおもひきこえ給 麥・³⁷憎さ——御憎さ 麥・³⁷給ひ——ナシ 御・³⁷なほ——なほこの君の 陽・麥・国・

第三類

³⁶てたれも——たれもく 麥・³⁶ましてえかくれあへ——ましてえはちあへ 国・³⁶めてたうこそはおはすれみな——めてたくおはすれとみな 陽・³⁶あさゆふにさふらひたまへは——あさゆふにさふらひ給へれば 麥・

³⁷つゐに見たてまつら——つゐに見たてまつら 陽・麥・³⁷ちかうまいら——ちかくまいら 麥・まいらせ 陽・³⁷きこえためる——きこえたる 麥・³⁷とつねに——なとつねに 陽・³⁷うれしくおもひて——うれしうおもひて 陽・³⁷世になう——世になく 麥・

第四類

³⁶人の——ナシ 国・³⁶きは——ほとも 陽・³⁶おとしめ——おしけち 国・³⁶きこえ給は——きこえ 麥・³⁶うけばり——うけはり給て 御・³⁶こと——所 御・³⁶きこえ——申さ 陽・³⁶御志——御志は 国・御志も 陽・³⁶紛る——紛るる 麥・³⁶移ろひて——かろいて 御・³⁶こよなうおぼし——こよなく 陽・³⁶あはれなる——あはれなりける 国・³⁶去り給はぬ——さりさり給えぬ 御・去り給えぬ 国・去り給はねは 陽・³⁶え恥ちあへ——はしてえかくれあえさせ 御・³⁶御方——御方に 国・³⁶と——とやは 国・³⁶やはある——人やはある 陽・やおほす 国・³⁶うち——心 御・³⁶大人び——おとなひなし 国・大人ひつつものし 陽・³⁶給へる——給御中 陽・³⁶切に——つゝみ切に 国・³⁶給へど——給へれと 麥・³⁶奉る——奉らせたまふ

に 陽・③⑤よう——ナシ 麥・③⑥典侍——典侍など 国・③⑥けるを——ければ 陽・

③⑦給ひて——ナシ 国・て 陽・③⑦常に参らまほしく——常にもみたてまつらはや 国・③⑦まほしく——まほしう 陽・③⑦おばえ給ふ——そおほえ給に 陽・③⑦御思ひどち——おもふち 麥・③⑦うとみ給ひ——はしたまう 国・③⑦そ——そとつねにきこえ給 国・③⑦よそへきこえ——よそへ 麥・③⑦べきこちなんする——へくなんある 陽・へきこちなんとする 御・③⑦なめしとおばさで——なとおほせられて 国・③⑦らうたくし給へ——らうたかりきこえ給 国・③⑦などは——のほとは 国・③⑦よう——よく 陽・③⑦似げなか——かけなか 御・③⑦聞えつけ——聞え 陽・③⑦もみち——もち 御・③⑦ても志を見え奉り——つつもをかしきさまなるをは心さしなと 陽・③⑦志を——まつ 国・③⑦見え——見せ 国・③⑦こよなう——こよなく 陽・③⑦給へれば——給へは 陽・給めれば 国・③⑦の女御——女御 陽・③⑦とも——と 国・③⑦ゆゑうち添へて——かりに 陽・③⑦給ひ——たまふ 国・なから 麥・③⑦名高うおはする——名高くおはする 陽・名高き 国・③⑦かたちに——かたち 陽・③⑦にははしき——にははしきかた国・

第五類

③⑥給へる——給ける 陽・国・③⑥めでたく——めでたくて 御・国・③⑥紛る——うつる 陽・国・③⑥御心移ろひて——まきれてむかしのこひしき 陽・国・③⑥御方——御方に 陽・国・③⑥御息所も——御息所は 陽・麥・③⑥給はぬを——給はぬにこれなん陽・国・

③⑦こち——心 国・陽・麥・③⑦などは——などの 陽・麥・③⑦ゆゑ——人ゆゑ 陽・国・③⑦憎さも——憎き 陽・国・③⑦たちいでて——たちそひていと 陽・国・③⑦奉り——奉らせ 陽・国・③⑦宮の——女御の 陽・国・

第六類

③⑥慰むやうなるも——慰ませ給 陽・慰さめさせたまふ 国・③⑥似給へり——似たてまつらせ給へる 陽・似たてまつり給へ

る 国・

③御中そばくしき——御中らひうるはしからす 陽・御中らへうるはしからす 国・③たぐひなし——たぐひなくをかし 陽・たぐひなくをかしけなり 国・

資料 16 ③・④

第一類

③なれば——なりとにや

④さまに——さまにそ ⑤悲しくおぼさる——悲しうおもほさる

第二類

⑥は——はまさりて 麥、陽 国・⑦ならび給ひて——の 御、麥、国・⑧おぼえも——おぼえ 麥・⑨聞ゆ——聞ゆめりし 陽・⑩この——源氏の 麥、国・⑪あたち——みかとうよろつにゐたちて 麥・⑫いとなみて——いたつきて 麥・⑬添へ——くはへ 麥、国・⑭元服——元服の 御、麥・⑮にて——に 御・⑯きやうなど——きやう 陽、麥、国・⑰仕うまつれる——れいの 陽・⑱もぞと——も 国・⑲とりわき——とりわきたる 麥、御、陽・⑳清らを——をのく 清らを 麥、国・㉑廂——廂に 陽、国、麥・㉒倚子——御倚子 陽、国・㉓申の時にそ——時なりて 陽、麥・

④苦しげなるを——苦しけなり 陽、麥、国・⑤見ましかば——見たまはましかは 御・⑥に——にいと 麥、御・⑦念じ——おほし 陽、御、麥、国・⑧かへさせ給ふ——かへす 陽、麥、国・⑨はた——は 陽、御、麥、国・⑩忍びあへ——たへさせ 麥・⑪ありつる——ありける 麥・⑫劣りや——劣りもや 陽、麥・⑬大臣の——左大臣 陽・

第三類

第四類

③④みかたよろつにゐたちて——みかたよろつにゐたち 陽・国・③④をのく清らを——みなおのく清らを 陽・

③⑤たとへん方なく——ナシ 陽・たとへん方なう 麥・③⑥世の——世 麥・③⑦藤壺——藤壺の 御・③⑧おぼえも——おもひ 国
 ・③⑨なれば——なりとて 陽・なるとや 麥・③⑩聞ゆ——聞える 国・聞めり 麥・③⑪おぼせど——おほせとさてのみあるへき
 ことならねは 国・③⑫にて——になり給とし 陽・③⑬し給ふ——の事あり 陽・せさせたてまつり給 国・③⑭ゐたち——めてたく
 国・③⑮ありし儀式——おほしきほりき 御・③⑯儀式——儀式の 陽・③⑰よそほし——よそほしき 陽・③⑱給はず——給ことなし
 陽・③⑲くらづかさこくさうゐん——こくさうゐんくらづかさ 国・③⑳仕うまつれる——仕うまつれるをれいの 麥・仕うまつれり
 れい 国・㉑おろそかなる——おそかなる 御・おろそかにつかまつる 陽・㉒もぞと——とも、 陽・もこそと 麥・㉓ありて
 ——に 陽・㉔て仕うまつれり——たり 陽・㉕東向に——向に 御・もんからむきに 国・㉖いし——いく 御・㉗冠者の御座
 ——かくわんの御座 御・㉘大臣の——大臣 御・㉙前——まへ 麥・せん 国・
 ㉚つらつき——つらき 麥・㉛顔の——ナシ 国・㉜事——ナシ 国・㉝蔵人——御天人 御・㉞清ら——きよらか 国・㉟ほ
 ど——ひと 麥・ほとも 国・ほといと 御・㊱おほしいづるに——おほしいつも 国・㊲御休所にまで給ひて——ナシ 国
 ・御休所におり給ひて 御・㊳さまに——御さまに 御・さまを 陽・にそ 麥・㊴まして——さして 御・㊵あへ——あへさせ
 御・㊶紛る——わする、 陽・㊷をり——とき 国・㊸ありつる——ありけん 国・㊹かう——かく 陽・㊺や——は 御・か
 も 国・㊻おぼされつるを——おもはされたる 麥・㊼美しげさ——美しき 陽・㊽大臣の——左大殿の 国・大臣 御・㊾腹に
 ——腹の 麥・㊿かしづき——いつき 陽・もちたまふる 国・㊿女——いつき女 国・㊿よりも——より 陽・

第五類

③①からやく日の宮と——か、やく日の宮とそ 陽・国・③②させ給ふ——いみじきけうらをつくさせ給ふ 陽・国・③③の春宮——

春宮 陽、麥・³⁸かりし御ひゞきに——ナシ 陽、国・³⁸おとさせ——おとらせ 陽、御・³⁸など——なとやうの 国、陽・³⁸冠者の御座——ナシ 陽、国・³⁸みづら——ひんつら 陽、御・

³⁹忍びあへ——忍はせ 陽、国・³⁹事——事も 陽、国・³⁹悲しく——いと悲しく 国、陽・³⁹おぼされつるを——おほしつるを 陽、国・³⁹ありける——ありけるは 御、麥・

第六類

³⁸を——事たとえんかたなきを 陽、事たとえんかたなくて 国・

³⁹あさましう——まためつらかにあさましき 陽、まためつらかにあさましう 国・

資料 17 40・41

第一類

④いかめしう——いかめしく・④まかでさせ給ふ——まかてさてたてまつり・

第二類

④御心——心ふかき 陽、麥・④内裏——うへ 陽、御、国・④にも——に 陽、④給へり——給 陽、御、麥、国・④ければ——ければ御ときよくて 御、麥・④さらば——さらはやかて 陽、麥、国・④御後見——後見 陽、④源氏——源氏の君 陽、麥、国・④人々——ナシ 麥、④聞え給ふ——給ふ 陽、麥・④物のつゝましきほとにて——はつかしくて 麥・④御祿——祿 陽、国、麥・④御心ばへ——と御心はへ 御、国、麥・④御心——と御心 御、国、麥・④せ給ふ——させ給ふ 陽、御、国、麥

④しなぐに——しなく 陽、御、麥・④のをりにも——に 御、麥・④まされり——まさりて 陽、御、麥・④なん——な

んありける 陽、国、麥・④その夜——やかてその夜 陽、国、麥・④きこえ——ナシ 御、麥・④思ひ聞え給へり——おほす御、麥・

第三類

④御ときよくて——御時よくおほして 国・御けしきよくて 陽・④はつかしくて——ものはつかしくて 国・陽・
④さてたてまつり——させたてまつり 陽、麥・

第四類

④らむの——らむと 国・④御心なり——おほしなりに 国・④なかめる——なかなる 国・④そひふし——そひふ 御・④にも——に 国・④おぼしたり——おもほしたり 陽・ほしたり 御・④さぶらひ——殿上にさぶらひ 陽・さふからひ 御・さぶらに 国・④まかで——まかりさせ 麥・④給ひて——給けるほと 国・④御酒——酒 国・④まゐるほど——さゐるほと 御・まゐる 国・④御座——座 国・④大臣——大殿 麥・④けしきはみ聞え給ふ事あれど物のつゝましきほどにて——けしきにて 御・④ともかくも——とかうも 麥・ともかへも 御・④聞え——ナシ 陽・申し 国・④前——せん 御・④内侍宣旨承り伝へて——ナシ 国・④物——物とも 麥・④賜ふ——まいれり 陽・たまへり 御・④大桂に——大桂 陽・御うちきに 国・④ぞ——しやうそく 陽・④御心ばへ——心はへ 陽・

④奏し——奏し給 陽・④ながはし——なかは 御・④ひだりの——たの 御・④左馬寮——近衛つかさ 国・④御馬——御馬に 国・④すゑ——すゑさせ 国・④賜はり——給へり 麥・④日の御前の——日御前の 麥・日の 国・日の御せんの 御・④をりびつ物籠物など——ひわりこおりひつ物なと 陽・をりひつものともおのくさしき 国・④右大弁なん——左大弁なとも 国・④屯食——こもなき 国・④どもなど——とも 国・④元服のをりにも——をりに 国・元服のよりも 陽・④給ふ——給へり 国・④作法——きしありさま 国・④きこえ給へり——ききこえ給 国・④ゆゆしう——ゆゆしく 陽・いみしう 国・④給

へり——給 陽・④若うおはすれば——若くおはするを 陽・

第五類

④〇あへしらひ——あひしらひ 陽、御、国・④いときなき——いとけなき 御、陽、麥・

④鷹——御鷹 御、陽、国・④どもなど——なと 陽、麥・④限りも——限り 御、国、麥・④給ふ——たてまつり 陽、麥・

第六類

④すぐし給へるほとに——おとなひたまへれば 陽・おとなひ給つれば 国・

資料 18 ④・④・④

第一類

④くはづかし——うはづかし・④いと——またいと・④かしづき——いとかなしくし・④給へり——たてまつりて・④あはひ——あそひ・

④すりしき——すりし・④広く——広う・④めでたく——めてたう・④ならむ——ならん・④となむ——となん・

第二類

④おぼいたり——おほしたり 陽・④やむことなきに——やむことなくおはするに 陽・④うち——はみかと 麥・④あまた——ナシ 陽・④ものし——あまたものし 御、麥、国・④御腹——御腹に 御、麥・④若う——若く 陽、麥・④いと——ナシ 陽、御、麥・④たるは——たまへは 陽、麥・④どもに——に 麥・④常に——常におほつかなかり 陽、御、麥、国・④御——御かたち 陽、麥、御、国・

④きこえ——きこえ給 陽、御・④似る人なくも——こころ見るよにありかたく 麥・④君——ひめ君 陽、麥、国・④とは

——と 麥、御・④心に——いかなるにか心に 麥、国・④かゝりていと——をきところなく 陽、麥、国・④ぞおはしける——
思ありき給 麥、国・④ありしやうに——ありしやうにも 陽、御、麥・④のをりく——などのをりく 陽、麥、御・④聞え
——きき 御、麥・④声を——けはひはかりを 麥、御・④おぼえ給ふ——おほえ給へは 陽、御、麥・④罪なく——よろつ罪な
く 国・④きこえ——たてまつり 陽、御、麥・④御方々の——御方の 麥、国・④世の中——世 陽・

④御遊 遊 御、麥、国・④おぼしいたづく——おほしいたつくさまをろかならず 麥・④母——こ 陽、麥、国・④殿は——
殿はもく 国・麥・④に——などに 陽、麥、国・④池の——いと、池の 陽、麥、国・④しなして——しなし 陽、国、麥・④
のみ——ナシ 陽、御・

第三類

④やむことなくおはするに——やむことなくおはす 麥・④はみかと——みかとの御 陽、御・④いとかなしくし——いとかな
しうし 陽、麥・④あてまつりて——たてまつり給て 陽、麥・たてまつり給へり 国・たてまつり給 御・

④けはひはかりを——けはひはかりきを 陽、けはひばかりをきを 国・④罪なく——よろつを罪なく 陽、麥・

④おほしいたつくさまをろかならず——おほしたるさまをろかならず 陽、おほしかしつくさまをろかならず 国・

第四類

④大臣——大殿 麥・④后腹——御后腹 麥・④母君——母官は 国・④きさい——きさき 陽・④はなやかなるに——物あさ
やかなるに 御・ものあさやかなるを 国・④かく——ナシ 陽・④おはし添ひぬれば——そおはすれば 麥・おは
してそひぬれば 国・④物にも——たゝいま物にも 陽・④給へり——給へかむめり 国・④いと——いまたいと 麥・④大臣の
——おとの 麥・大臣 陽・④よから——よくはあら 国・④え見すぐし——見すくし 陽・人がらをえすくし 国・④かしづき
給ふ——ナシ 御・④あはせ——あらせ 国・④かしづきたる——あしつききこえ給 国・④あらまほしき——あらまほろしき

麥・

④ならん——なん 御・④似る人なくも——にたる人なくも 国・よににる人なくも 陽・④おほいどの——おほと
をかしげに——をかしけにて 陽・④人と——人のほと 国・④心——御心 国・④おぼえ給ひて——のみおぼえ給つつ 国・④
おはしける——なけかしかりける 陽・④大人になり——おとなひ 陽・④までぞ——まて 国・④にも——へも 御・④入れ
——入り 陽・えいり 国・④をりく——をりく——と 国・④音に聞え——音をきき 麥・音に 国・④のみ——シ 御・④
好ましく——好ましく 陽・④さぶらひ——とさぶらひ 陽・④大殿に——大とのには 陽・④絶えく——に——絶えく 麥・④
たゞいまは——たゞいま 御・④御方々の人々——さふらふ女房わらはよりはしめて 陽・御方々の人々さふらふ女房わらはよりは
はしめ 国・④おしならべたらぬ——おしなへえならぬ 国・④すぐり——すり 御・④心に——心 国・

④おぼしいたづく——おほしいたて 御・④にて——にてこの御かたには 国・④たくみづかさ——たてみつかさ 国・④にな
う——ナシ 国・④すりしき——すりそく 麥・④給ふ——給に 麥・④なりける——なる 御・④広く——もろく 国・④所に
——所にも 陽・④住ま——すき 麥・④難かしうおぼしわたる——おもしろさる 陽・④いふ名——ナシ 陽・④光君といふ名
は高麗人のめできこえつけ奉りけるとぞ言ひ伝へたる——ナシ 国・④きこえ——ナシ 陽・④けるとぞ言ひ伝へたとむ——
たる名なりとぞ 陽・

第五類

④の中を知り——をまつりこち 陽、国・④大臣——おほいと 陽、国・④宮——この宮 陽、国・④御腹は——御腹のは
陽、国・④には——にも陽、国・

④かな——かなとのみ思ひありき給 陽、国・④かしづかれたる——かしづかれたまへる 陽、国・④見ゆれど——見え給へれ
と 陽、国・④ほどの心——ほと 御心 国、御・④心ひとつに——ひとへ心に 御、麥・④すぐり——すぐりいて 陽、国・

④し——よろつに 陽、国・④になう——になく 陽、御・④やうならむ——やうなる 陽、御・④すゑて——くして 陽、国

第六類

④腹になむ——腹のみこにてたうたいの御いもうとに 陽・のみこにてたうたいの御いもうとにてなん 国・

④にも——なとにも 陽・なとには 国・④いと——はかりもなく 陽・はかりもしらす 国・

付記——本稿は「桐壺巻の本文系統論と物語の享受」と題して昭和五九・八・二・第66回全国大学国語教育学会で口頭発表したものを補訂、改稿した。学会では清水茂夫先生にお世話になった。厚くお礼を申しあげる。

(昭五九・十一・六・母の五年祭の日に記す)